

お前の主人は誰

望月秋生

## 誓約書

誓約は三つ

一つ目、金は楠部から借りる事

二つ目、楠部以外の人間、または消費者金融から借りない事

三つ目、借金は俺に交際相手、もしくは結婚する時に清算する事

大学時代、法的効力は無いけどね、と笑いながら楠部は誓約書を出してきた。

もつといういろいろごちゃごちゃ書いてあったけど、この三つを守ってくれさえすれば、いくらでも金を貸すと言われて——俺はほいほいと誓約書にサインした。

今の俺は、どれくらい楠部に借金をしているんだろう。大学を卒業した時に、借金は七桁台だと、あいつは天使みたいな笑顔で教えてくれた。

七桁後半……もしくは八桁台……最悪、九桁……？

ぶるりと、真冬の公衆トイレで用を済ませた時みたいに、背中が震えた。駄目だ、駄目だ、駄目だ。このままでは駄目だ。

今年こそ——もう二十七になるのだから、今度こそ、楠部に金を返す算段を

付けないと。

くすべそういちろう  
「あ、楠部聡一郎」

「この頃、良く出てるよな」

昼休み、客先常駐のエンジニアでござった返す食堂。俺はデスクが隣の同じ会社から来た同期一人、D&D開発チームで共に働く、同じく客先常駐の——会社の同僚四人の合計六人で、昼食を食べていた。

今日のA定食は、モツ煮込み。うきうきしながらテーブルに着くと、設置された液晶テレビに、デカデカと楠部の顔が映し出されていた。

「めちゃくちゃイケメンですよ〜。これで億万長者でしょう?!」

俺の隣で声を上げたのは、今年入って来たばかりの新人——艶やかなストレ

ートの黒髪が綺麗で、つい目で追ってしまう日ひだかまなみ高愛美だった。彼女は液晶

テレビに映った美男子に、目を輝かせていた。

白いトップスに淡い色のカーディガンと、繊細そうなレースのタイトスカ―

ト。ちらっと手元を確認する。今日の彼女のランチはヒレカツ定食。

昼食を食べる時、魚より肉を頼むことが多いなと思い出して、好きな食べ物

は？焼肉とか好き？良かったら今度一緒に——この先一生、本人に言えないフレーズを次々と思いついては、話しかけるコミュニケーションをする。

一生、話しかける機会はないと、ちゃんと理解している。だから妄想ぐらい許して欲しかった。

「やばい……モデルとか俳優やっててもおかしくないですよね」

本当、凄いイケメンだよな、と心の中で同意する。液晶テレビに映った楠部は、上品な笑みを浮かべながら、マイクを手に取り、壇上に立っていた。大学に講師として招かれた時の映像らしい。テロップにはこれから日本を変える投資家、今話題のイケメン社長と安っぽい文字が並んでいた。

「は〜若い子は好きだね、こーいう男」

「かつこいいじゃないですか！それにこの人、学生時代にベンチャー立ち上げて、二十代なのに成功して、凄い人ですよ」

歯科矯正された真っ白い歯を時おり見せながら、堂々とした立ち姿で講義をする楠部の全身を、カメラが追う。

素人目にも分かる高そ〜なスーツ越しからのぞける筋肉質な体つき。俺はベ

ツドでいつも、デパートに置いてあるトルソーみたいだなんて、その胸板に顔をくっつけている。

ベッドでは乱れる豊かな黒髪も整えられており、シャープな鼻梁に、くつきりとしたアーモンド型の目は、人間離れしていて、その美貌は作り物めいてすらいた。

日高愛美の上司にあたる、四十代の同僚は苦笑した。

「こういう非の打ち所がない男は、せめて性格が悪いとか、悪評があったら良いよなあ」

残念。性格も良いんだな、これが。大学時代、周囲からだらしないと散々言われた俺に、あいつは金を貸してくれた。

在学中に立ち上げたベンチャー企業を、ソフトウェア会社に売却。その売却資金で、ベンチャーキャピタル会社を立ち上げた。

金は有り余っていたのだろう。当時というか、今もだが、借金に限度は無く、言えばいくらでも——当時は成功者として、キャンパスを歩けば人が群がっていた楠部。

しょうもない、どうしょうもないクズの俺に、小銭を恵んで、ノブレスオブリージュを気取っているのだと、卑屈な俺はへこへこしながら金を受け取っていた。

あの時より何倍も華やかになった楠部。

キャンパスで、別の意味で話題になっていた俺をマンションに住まわせて――それで俺達は、寝ている。

「そういうの、全然無い人なんですよ。独身で、この前、社員さんのインタビュ―記事、私読んだんですけど、仕事中毒だって」

「ふーん……俺は、誰だっけ。ほら、同じくらい若い奴が出てるだろ、上場して、ユニコーン企業だって言われてる……」

「ああ、おおつかたすく大東将？」

「そうそう。あっちの方が良いな。男っぽくて、同性から見ても憧れるよ」  
食堂を囲いながら、同僚たちは好き勝手に話をする。有名人は大変だよな――と、相槌を打ちながら、味噌汁を啜った。

隣の日高愛美は「大東将……？」と興味のない話題が出たことに、あからさ

まに声のトーンを落としたり。

マイペースで、でも仕事には熱心で、ちよつと喜怒哀楽が分かりやすい子。

ああ、可愛いなと思ったところで『入ってきた新人、気に入ってるんだ？』と

昨日——耳元で囁いた、あいつの声が唐突によみがえった。

——昨日の夜、ベッドで四つん這いになった俺をバックで挿入しながら、あ

いつは荒くなつた息を吐いた。

その言葉の意味するところを理解した俺は、恐怖で体が震えて——怯えを察

した楠部は逃がすまいと、俺の勃起したものを、大きな手でキツく締めあげて

きた。悲鳴を上げて、崩れ落ちると、耳元で『付き合いってもいいんだよ？』と

楽し気な声でした。

『あつ……』

『ほら、良いなよ。可愛い新人が好きですってっ』

『あつ、っ違う、お願いっ違うから、そこばっかやめてくれっ』

浅い挿挿を繰り返しながら、あいつは俺の弱いところばかり執拗に責めた。

クソっデスクワークなのに。

「確か大東将は、楠部聰一郎と大学同じじゃなかったっけ」

「え！そんなんですかあ。知らなかった〜！」

上司の何気ない呟きに、日高愛美は途端、甲高い声を出した。自分の興味が  
あるものとなしもの、はっきりしている。

俺は上がった口角を人に見られないよう、味噌汁を飲み干した。

日高愛美と付き合う？馬鹿言え、借金は到底、返せる額じゃない。人は大概、  
交際相手に莫大な借金があれば、別れを告げる。そして何より、日高愛美は俺  
に興味も関心もない。

根暗な先輩社員というのが、明るい彼女からの評価だろう。それよりも、俺  
が密かに入ってきた新人を気に入っているとは、あいつはどこから聞き出した  
のか。

ここは都心の一等地に建てられたビルの二十四階。投資やら医薬品やら、幅  
広くやっているグループ企業のカード事業を行う子会社。

そして俺は、その子会社の下の下の下請け——客先常駐と呼ばれているエン  
ジニア。

何百個とデスクが並べられた空間。同じく客先常駐として、中小企業から出向するエンジニアの入れ替わりは激しい。ここに楠部の監視の目がある？  
まさかね。

どこまでも金にだらしなくて、駄目人間、クズと言われていた俺を、楠部が監視するわけ無いだろう。あいつもそんな暇じゃない。

「もー、古こやなぎ柳さん、全然喋らないんだから！」

「え、あ……ごめん」

「日高さん、こんな奴、ほっといて良いよ。どーせ楠部聡一郎とか大束将に嫉妬してんだろ？さつきから不機嫌そうな顔してるよな」

「あー……あはは」

前に座る、同じ会社の同期である室むろた田が呆れたような顔をしていた。顔に空気読めよ、と書いてある。俺はへらへら笑いながら——大学時代から変わらない、人から何を言われても、顔に標準装備していた、ぎこちない笑みを作った。

「なんだよ、古柳。まさか同年代だからって、張り合おうとしてんのか」

「違いますよ。勘弁してください」

「こんな殿上人に俺ら底辺エンジニアが、お会いすることはないんだから。ちやんと目の前の仕事をしなさい」

「ははあ。午後から精進します」

やいのやいの言われていると、昼休み時間が残り半分を切っていた。全員が食べ終わると、食器をカウンターに片付けていく。デスクに戻る廊下で、自然と日高愛美と隣になった。

「本当にかっこいいですね……」

「あはは、確かに」

ほんやりと、夢見るように呟いた日高愛美はとても可愛かった。頬をちよつと赤らめて、大きな瞳は、アイドルに憧れるように、遠くを見つめていた。

もちろん、そのまつ毛バサバサの瞳に、俺が映ることは今も、これからも無い。  
い。

「こんなこと言ったら、古柳さん引いちゃうかもなんですけど……」

日高愛美が秘密話をするように、声を潜めた。俺はつい腰を屈めて、その言

葉を——なんでもいい。日高愛美の話す内容は、全て耳に入れておきたい。

「うん、なに?」

「私、楠部聰一郎に出会えたら、絶対に彼女の座を狙います。ほら、プロ彼女とか、ちょっと前に流行ったじゃないですか。あれ、憧れます」

「……そっか」

うん、日高愛美の声は可愛い。全て可愛い。だからいつもどおりの、あの笑顔を出そうとして、顔が歪んだ。

ぶちまけてしまいたい。俺はクズでどうしようもない人間で、金をやる楠部は、聖人のように称えられていた。

そうだよ、底抜けに優しくして、俺がギャンブルで大損するたびに、ソシヤゲのガチで金を溶かすたびに……金をくれた。

でもそのクズを、今はセフレにしているよ。

なんて言えるわけないんだな。信じてもらえるわけないし。

俺は表情を見られないよう、日高愛美から数歩遅れて、廊下を歩いた。

## マンション

楠部との同居は、職場の最寄り駅から一駅の距離にある、麻布十番駅。徒歩三分のマンション。

『ここなら朔の仕事場に近いでしょ?』

こちらの返事も聞かず——俺にそんな選択肢を与えられていないのは、知っていたけど。

二十一時過ぎ、マンションの自動ドアをくぐった。エントランスはシンプルな造りでも、金持ちの住処らしく、床は雲母を敷き詰めたような輝きがあった。重厚感のある場所は、歩くたびに背筋を正されて、気疲れしてしまう。

ガラス張りになったエントランスから、手入れされた中庭がよく見える。毎朝、目にする植物を素通りし、カウンターの前を通り過ぎた。

二十四時間常駐する警備員とコンシェルジュに会釈され、ぺこぺこ頭を下げながら、エレベーターに乗った。

楠部は注目される仕事柄、セキュリティが頑丈なマンションを選んだ。来訪

者には都度、セキュリティカードを貸出、エレベーターは訪問する階以外には止まらないという徹底した造りだった。

誰も乗ってこないエレベーターは静かだ。上がっていく機械的な音を聞いていたら、チンと音がして、エレベーターが開いた。

同居する部屋のドアを開けながら「ただいま」と声をかけた。微かに漂うコンソメの匂いに、夕飯は何かなとリビングに向かった。

「あ、おかえり……はい。今、帰って来まして、ええ、はい、代わりましょうか？」

3LDKの広々とした部屋。キッチンに立った楠部が子機を持っていた。今時、珍しい家電があるのは、俺の母親が電話をかけてくるから。

だから、誰と電話しているのか、すぐにピンときた。と同時に心拍数が上がったので、洗面所に向かう。

乱暴に手洗いうがいを済ませて、深呼吸をした。大丈夫、もう一緒に暮らしていないんだ、大丈夫。

リビングに向かうと、微笑んだ楠部と目が合った。

「そんなことはありませんよ、お義母様。僕の方が朔君に助けられています」

お義母様

楠部は俺の母親を自然と「おかあさま」と呼ぶ。テレビで見る成功者に恭し

くされて、電話口の母親が、喜んでいるのを知っている。

「朔」

「ああ」

楠部から差し出された子機を受け取ると「朔？聰一郎君に迷惑かけてない？」ときりきりした声。心臓がぎゅっとなった。

「大丈夫だよ」

「そう？あなたは昔からドンくさいし、頭も悪かったでしょう？聰一郎君みたいな子と同居して、迷惑かけてないか心配よ」

母親の尋問じみた質問に「ああ」「うん」「大丈夫」「ちゃんとしてる」を口

ーテーションで回した。

今はまだ。

昔、同じ屋根の下で暮らしていた時は地獄だった。両親共に国家公務員で某

省勤め。せめて、自分達ぐらいのオツムをと、長男に期待した。見事、期待を裏切ってしまった俺は、テストの点が悪ければ父親には殴られ、母親の甲高い声で、延々と詰られる十代を過ごした。

でも電話口ならば、俺は殴られない。

「あ、そうそう。<sup>しよう</sup> 翔がね、模試でA判定だったのよ。やっぱりあなたとは違うわ」

歳の離れた弟は、今年、高校三年生。俺が両親に殴られながら、なんとか合格した大学も、余裕で通りそうだと、電話口の声は機嫌が良かった。

「あなたは失敗だったから。翔には力を入れたけど、良かったわ」

「そう」

失敗作だったらしい俺への干渉は、大学入学時にかくんと減った。ターゲットが弟になったから。翔のお受験に力を入れ始めた両親は「あなたと違って物覚えが良い」と事あるごとに褒めていた。

弟との会話は数える程しか無かった。会社の同僚の方が、よっぽど趣味とかプライベートを知っている。弟というよりも、遠くて近い他人の話しを、俺は

右から左に聞き流した。

「とにかく、聰一郎君に迷惑かけないでね」

「うん、分かったから」

ぷつと切れた子機を戻していると「ロールキャベツだよ」と夕飯を告げられた。

「マジっやった」

リビングのテーブルに並べられた真っ白い食器は、どこのブランドだったっけ。楠部が選んだけど、忘れた。

純白の深皿に盛られたのは、和風ロールキャベツだった。以前、美味しいと何気なく言ったら、定期的に出てくるようになった。

炊き立ての白米、味噌汁、きんぴらごぼうに、腹が鳴った。楠部と向かい合う形で椅子に座り、いただきますと手を合わせた。

味噌汁を啜ると、食欲が増した。ご飯を一口、熱いロールキャベツを口に放り込んだ。

「仕事、どう？」

「えー……今んとこ忙しくないかな。でも再来月リリースだから、来月から忙しくなるかも」

「迎え、寄こそうか」

「いいよ。できるだけ電車で帰るから」

目を伏せた楠部は「心配」と言った。長いまつ毛を震わせる様子は、ドラマのワンシーンみたいだった。

「……じゃー、終電になりそうだったら、連絡する」

「うん」

「あ、そっちは？忙しいんじゃないの」

話題の投資家、イケメン社長と、昼食で見たテロップを思い出す。強調した  
いのか、ゴシック体が映像と合ってなくて、すげーダサかった。

イケメンで、成功者で、そんで料理上手。玉に瑕なのは、俺みたいなのをセフレにしていることか。

「リモートワークにシフトしてるから、大丈夫。夕飯ぐらい作れるからね」

「そっか……」

食事を続けながら、昼間に見たニュースを伝える。照れたような笑う楠部と、ロールキャベツを食べ終わった頃、リビングのテレビを点けた。

バラエティにワイドショー、お笑い……これでいいか。お笑い番組にチャンネルを回して、ソファに腰掛けた。

視聴五分で飽きた俺は、スマホを取り出した。今、ハマっているソシヤゲにログインする。

イベント真っ最中で、盛り上がりがピークの時期。SNSに作った、ゲーム専用のアカウントをのぞけば、TLは賑わっていた。

ソファが揺れて、隣に楠部が腰かけた。横目で見ると、洋書のペーパーバック。今度、ハリウッドで映画化するSF小説だった。テレビから流れてくる笑い声が、リビングに響いていた。

手元の画面に視線を落とした。イベントで、以前から欲しかったキャラの排出率が高まっていた。イベントガチャ、まずは一回で石五個×二十連の一万円を、聴一郎のクレジットカードから引き落とす。

……でない。

でもまだ一万円だ。今度は三万円をクレジットで引き落とし、回す。出てくるのは既存キャラだったり、雑魚ばかり。今度は五万……。

イライラと人指し指で画面を叩いていたら、肩が重くなった。

「欲しかったキャラ、出た？」

「出てない」

「そっか」

楠部がいつの間にか、洋書をローテーブルに置いていた。肩を抱かれるのはいつもの合図だった。もうガチャとか頭から吹っ飛んだ。慣れた手が、ベルトを外し始めた。

「風呂……入ってからで」

「このままがいい」

ベルトを抜かれて、スラックスのボタンを外された。テレビの音を大きくしようとしたら、リモコンを楠部に奪われた。静かになった空間に、チャックが下ろされる音。俺は耳を塞ぎたくなった。

「足、開いて」

ラグに腰を下ろした楠部が、股間に顔を埋める。ボクサーパンツを下げられ、ぶるっと飛び出たペニスを、ひんやりした手が握る。

楠部の長くて白い指が、巻き付いていく様から、目が離せなかった。

唇間、イケメンだと日高愛美に騒がれた男の、形の良い唇が開く。するっとピンク色の舌が、亀頭に垂らされた。

「あっ」

「ん……」

舌先でちろちろと鈴口を弄られる。下腹がムズムズして、鈍い快感があたりをもちあげる。

湿った柔らかい舌で、亀頭を包むようにされると、腰が揺らめいた。じゅっと啜る音がして、声を上げた。

もっと、もっと。直接的な刺激が欲しい。楠部の頭を押さえ付けると、ペニス全体が、生暖かいものに包まれる感覚がした。

「あ……っ、そっいちろお」

結構、奥まで啜えられて、ぐぷっと音がした。楠部の舌が蛇みたいに巻き付

いて、ペニスを締め付けるようにする。気持ち良い。

快樂を与えてくれる男の髪に指を絡めた。柳眉の下に配置された瞳が、輝いていた。禁欲的な美貌とは相反する舌使いに、俺は声が抑えられなかった。

「……………ん、んっあ、ああっ」

チャックの音とかどうでもよくなるくらい、水音が大きくなっていく。楠部が頭を上下するたびに、腰が動いていた。もっと、もっと、もっととして。

「あ……………」

裏筋をしつこく舐められて、高ぶりを放出した。ソファに背中を預けていると、男の咽喉仏が蠢いた。残滓を舐めとるように、桜色の舌尖が亀頭を這う。

おそうじフェラ、と単語が頭に浮かんで、気分が沈んだ。

ねぶ  
舐っていた舌が離れて、やっと息を吐けた。

「昨日たくさん出したからかなあ。今日は薄い気がする」

何が不満なのか、楠部はつまらなさそうな顔をしていた。萎えたイチモツを

離さず、人指し指の爪で、鈴口を もてあそ 玩ぶようにする。堪らず、背中が海老

反りになった。

「もう一回、しよっか」

「風呂、入りたい……」

「じゃー、一緒に入る」

腕を引っ張られて、ソファから立ち上がった。大学時代から、変わらないやり取り。もう何回、楠部にフェラされたか。もう何回、楠部のちんこを突っ込まれて、ベッドでよがったか。

昨日もやったのに。

今日は風呂場で突っ込まれるのかと、気分は沈み、体は興奮していた。

## 出会い

楠部と出会ったのは、大学に入学したばかりの浮ついていた頃。まだ十九歳の誕生日を迎えていなかった俺は、両親から離れた一人暮らしに、開放感を味わっていた。

中庭に、サークル勧誘のテントが張られ、チラシが舞っていた。ボート、水

泳、茶道、模型……理工学部を選択した俺は、女子の少なさにショックを受けていた。

ここでサークルに入らなければ、俺のような人種は一生、女の子と付き合い合えないかもしれない。

パステルカラーのスカートを履いて、髪の毛を茶色に染めた、お洒落な女の子と会うには。

女子大を歓迎するインカレサークル、ヤリサーって噂のテニス部か……ハドル高過ぎ。自然に女の子と出会えるサークルは無いかと、うろついていた時だった。主張しない、小さな声が、喧騒の中から聞こえてきた。

読書会です。

俺はバッグに入れていた文庫本を取り出した。山本周五郎の「赤ひげ診療譚」。俺にとって小説は救いだった。

ゲーム、携帯、漫画……受験に無駄だと、娯楽を取り上げられて、唯一、手

元に残ったのが小説だった。制服を着ていた学生時代、国内の作家を貪るように読んだ。片手に持ち、恐る恐る近づいたら、あっさり加入できた。

新入生を歓迎する、一回目の読書会に、楠部は参加していた。講義室の隅で、新入生を含めた数人が、椅子を円形にして、自己紹介を始めた。

『楠部です。楠部聡一郎と言います。学部は法学部で、主に海外の作家を読んでいます』

まだ十代だった俺達。なのに、楠部は他者を圧倒する威厳というか、落ち着いた、堂々とした態度だった。

小さな卵型の顔に収まったパーツは、不格好なもの無く、全てが美しくかった。柳眉を描いた額に、どこか憂いを帯びた明眸。すっと通った鼻筋の下に、形の良い唇が上品な笑みを作っていた。

誰かが——その場にいた全員だったかも。感嘆したように溜息をついた。

バランスと顔のパーツが、奇跡的なコラボレーションをした男。美の女神に

愛されているとか、陳腐なワードが頭をかすめた。

完成された美が、彼に力を与えているのか。サークルの先輩達含め全員が、彼の一举一動に注目していた。

こんな風に生まれていたら、俺も親に殴られずに済んだのかな。

惨めな妄想に浸りながら、楠部の後に自己紹介をした。

『古柳朔です。学部は理工学部で、日本文学が好きです』

後から、名前や好きなジャンルを忘れられることが多かったのは、楠部のせいだと、今でも思っている。

周囲の視線を、いつでもどこでも、かささらっていく男。

ひっそりと肩を落とした。読書会は他大学の女子も来るらしいが、みんな楠部に注目するだろう。女の子と自然な出会いが、隣に座った男のせいで消滅した。

恨めしい気持ちで、隣の美男子をちらちら見ていたら、目が合った。

『日本文学って、誰が好きなの？』

『え……武者小路実篤、田山花袋、夏目漱石、たくさんいる。そっちは？』

『俺？ジャン・ヴォートランとか好きだな』

聞いたことも無かった。楠部はフランスの現代作家だと教えてくれて、反対に夏目漱石を一冊も読んだことがないと言った。高校でころろ、やるだろと言ったら、帰国子女だと言っ。

話せば話すだけ、ジャンルが全く合わなかった。だけど逆に新鮮だった。楠部も同じ気持ちだったのか、会うたびに本の貸し借りを行うようになった。

……あの頃はまだ純粹な、友人として健全な関係だったと思う。ある時、楠部が考えあぐねたように言った。

『君の好きな小説って、いつも主人公や周囲は苦悩しているよね』

『……共感ってか、苦しんでいるのを見たら、ああ、俺だけじゃないんだなって思うんだよ』

『それはどういふこと?』

ぽろっと、親から殴られてきたこと。なんとしてでもこの大学に合格しろと、スパルタ教育を受けてきたこと。文学だけは娯楽だった……もうその時はかなり気を許した関係で、お互いの家を行き来するようになっていた。楠部は驚愕し、背中を優しく擦ってくれた。

『辛かったね』

過剰に憐れむでもない、自然と寄り添う楠部に胸が熱くなった。生まれも育ちも違う同性。だけどこれって、親友と言ってもいいんじゃないのか。

絶版や電子書籍になっていない小説は文庫本で貸し借りし、他はネット上の本棚共有サービスに、二人でアカウントを作った。楠部は日本文学を読み漁り、俺は海外作家の面白さに、夢中になった。

でも一つだけ気がかりだったのは、楠部が好きだと言った作家、ジャン・ヴオートラン。特にこれが一番のお気に入りだと貸してくれた「グルーム」に、

首を傾げた。

『なあ、これ、面白いか？』

『うん、俺もこの主人公には共感できるんだ』

ますます訳が分からなくなった。グルームの主人公は、端的に言って、社会不適合者だった。上手くいかない現実には耐え切れなくて、妄想の世界に浸って  
いNo。

『どこらへんが？共感できんの？』

『中身がないところ。主人公は妄想の世界にいるけど、その妄想もどこか見たような、陳腐で薄っぺらだろう？継ぎ接ぎで見た目を取り繕って、肝心の中身が空っぽなんだよ』

自虐的に笑ったのが、珍しかった。こいつが薄っぺら？中身が空っぽ？親しくなるだけ、非の打ち所がない男だと、嫉妬する気持ちも湧かなくなっていたのじ。

親は資産家。父親は日本を代表する企業のトップで、自身は起業を考えている真つ最中。元女優だったらしい母親似の美貌は近寄り難く、それが気さくな態度とギャップがあつて、ますます人気――

お前は薄っぺらい人間じゃないよと、言いたかった。だけど楠部自身がそう思っているなら、簡単に否定もできなかった。

『継ぎ接ぎつて、皆そうじゃねーの。なんとか社会が望む人の形して……でも継ぎ接ぎの中身はちゃんとあるよ……継ぎ接ぎばつかに目が向いて、中身まで見る余裕がないのかも……』

俺に寄り添ってくれた楠部を、俺も慰めたい。おっかなびっくり言葉をひねり出すと、楠部は何故か、目を輝かせていた。

『そうかな？』

『そうだよ』

ぱつと花が咲いたように、親友が笑った。美形だから笑うだけで、室内の空

気が浄化される。

俺達は基本、本の貸し借りをして、感想を言い合って、食事をして、出かけて……あの頃は友達だった。

いつからだっただけ。楠部が会うたびに、必ずプレゼントを渡してくるようになったのは。

最初はコンビニのお菓子。人から貰って余ったからと、五百円分のクオカード、ギフト券……最初はラッキー程度だったのが、万単位になったところで、躊躇うようになった。

『気にしなくていいよ。貰い物だから』

会うたびに渡される、数万円分のギフト券。いつの間にかそれが当たり前になって、待ち望むようになっていた。

バイトをしなくても、月十数万円分の収入が入っていた頃、俺が決定的に転落する出来事があった。

成人式も終わり、大学生活も半ばに差し掛かっていた。楠部と変わらず本の貸し借りをしていたが、彼は会社を立ち上げて、キャンパスの有名人となっていた。

でもいくら人が群がっても、いつも俺に会いに来てくれたのが嬉しくてしょうがなかった。

ある時、講堂で同じ授業を取る友人の篠田が、話しかけてきた。

『古柳、オンラインカジノ知ってる？』

見せられたスマホの画面に、首を傾げた。キラキラしたフレームデザインに、カラフルな羅針盤みたいな道具が映し出されていた。ビットカラーの口グインボタンが目立つところにあり……見た目、安っぽいデザインだなと、最初は引く気持ちすらあった。

ギャンブルなど一度も経験が無かった俺は、つい大丈夫かと聞いた。

『それが結構、当たるんだよ』

『これで俺、月数十万は稼いでるかな』

『家庭教師代、全部突っ込んでる』

篠田の熱弁に飲み込まれて、その場でアカウントを作った。

『試しに百円のスロットやってみたら？』

百円なら、スクラッチくじより安いか。言われるがまま回したら……

『え?! あつ、すげえ! おま、古柳、すげえな!』

三桁の数字に、ゼロが三つ。

二十万円に化けた。

そこから、俺の中で何かが壊れた。百円がマイナス、次に千円を投入して、

千五百円に。二千円は五百円でマイナス、一万円……楠部から貰ったギフト券を換金し、オンラインカジノにつき込んだ。

負けるたびに、もう一回。

もう一回だ。

もう一回やれば、次は当たるはずだと、画面を叩いた。

貰ったギフト券では足りず、クレジットカードの限度額がいっぱいになった頃。ここでさすがにやばいと焦りが生まれた。

親にばれたら……実家に戻されて、殴られるかもしれない。バイトに応募し、クレジットカードをもう一枚作った。

五十万円を引き出して、一時的な返済にあてたところで、肩の荷が下りた気がした。なにも解決していないのに、ほっとして、百円が、二十万になったんだ、いけると声が聞こえた。

百円が二千倍になった。だったら一万円、投入したら……俺はスマホの画面を食い入るように見つめていた。

三枚目のクレジットカードを作ったタイミングだった。楠部のプレゼントが変わったのは。

ギフト券と一緒に、茶封筒を手渡された。そろそろ中を覗くと、札束。ぱつと数えて、十万円はある……ぎゅっとして押し返したら、『じゃあ、持つておいて』と微笑まれた。

『持つとく……？』

『うん、預かっておいて欲しいんだ』

預かるって？どうして、何故、疑問で頭がいっぱいになった。ぎゅっと両手を握られ『預かって』と囁かれた。

『俺が信用してるの、古柳だけなんだ』

『……分かった』

『ありがとう』

十万円が入った茶封筒。三日後、構内で会ったら、また渡された。会うたびに渡される茶封筒が百万になった時だった。

楠部が返せと言わないのをいいことに、預かった金を返済とギャンブルにつ

ぎ込んだ。大丈夫だ。

楠部に返せって言われるまでに、バイトで稼げばよい。

オンラインカジノもある。

もう一回。もう一回、スロットで。

一万円を百万にすれば、楠部にはれない。

大丈夫。大丈夫。からからになった口内で、言い聞かせた。

楠部から十万円を渡されたら、すぐにログイン。十万円が、数時間でマイナ

スになったら、また楠部に会いに行った。

数時間前にあった友人が姿を見せても、楠部は茶封筒を出してきた。

『預かっておいてくれる?』

『うん』

楠部の茶封筒は必ず十万円。それが時々、二十万、三十万とアップする時が

あった。楠部の気まぐれだと、テンションを上げていた俺はしばらくして、法則に気が付いた。

十万円がアップする時。

それは二人掛けのソファに座った時、楠部の手が、俺の太ももに置かれた。何度も撫でられて、くすぐりたいと笑ったら、手が離れた。

あの時は三十万、入っていた。

出かけた先、並んで歩いていたら、自然と手をつながれた。ふざけているのだと、お返しに恋人つなぎをして、駅のホームでじやれた日。

あの時は二十万、入っていた。

頭を撫でる、髪を梳く、肩を組む……接触がある時に、金額が増えている。気が付いてから、俺は楠部の接触を拒めなくなった。

楠部の手は、首、顎、唇の端と、どんどん大胆になっていった。最初はやりわりと拒否すれば離れていた手も、身じろぎして拒んでも、這い回るようにな

った。

お金が欲しい。

もうその頃には、楠部が望んでいることも察していた。でも俺達は男同士だ。入学時、期待していた女の子との出会いもなく、異性の恋人すらない俺には、踏み出せなかった。でもやっぱり

お金が欲しい。

オンラインカジノ、クレジットカードの返済……お金が足りない。もっとお金が欲しい。

お金が欲しい。

バカラ、ブラックジャック、クラップス、ルーレット……掛け金百円から、百円さえ貰えたら俺、何倍にして返すから。この前は失敗した。でも俺はビギナーズラックで二十万にしたから。次は百万も夢じゃない。だから

お金下さい

楠部に土下座して、泣きつこうとしていた時だった。彼のマンションで、ほっそりとした長くて白い指が伸ばされた。

あの時の親友は、奇妙だった。形の良い眉を潜め、きゅっと唇を結んで真剣な顔をしているのに、熱を帯びた眼は瞬き一つしなかった。あれは……息を潜めて、獲物カクトムシを捕まえようとする子どもの表情。

胸元のボタンを外され、手を入れられた。

『っ……っ』

思わず、払いのけてしまった。ひんやりとした指が、鎖骨を撫で上げる感覚に、鳥肌が立った。でもショックだったのは、一転して冷たい視線だった。放り投げるように渡された茶封筒。

マンションを出て、駅のトイレで確かめた。十万円だった。個室トイレで、涙が出ていた。

拒まなかったら、いくら貰えた？

皮算用する浅ましい自分が嫌だった。同時に、楠部が望んでいるものは、もつと嫌悪感があった。

気まづくなり、楠部を避けていたら、借金は膨らんでいった。時給千円で稼ぐバイトで得た数万円は、ギャンブルに消えた。

三枚目のクレジットカードが使えなくなり、自動契約機で借りた五十万円も底をついた。借金は総額で三百万。

楠部からお金が貰えないから……震える手で、親友に電話をした。

相談したいことがある。ファミレスに来て欲しいと言ったら、すぐ行くからねと優しい声だった。いつもと変わらない穏和な声音に、ほっとした。

楠部が望んでいるもの。

それはもしかしたら、俺の勘違いかもしれない。キャンパスの、若き成功者。相手には困らないはずだ。俺のような同期に拘る方がおかしい。

ファミレスの床に土下座して……金を借りれたら、今度こそギャンブルをや

める。俺は楠部を待つ間、うつすらと傷がついたグラスを見つめていた。

『古柳』

『楠部……』

ファミレスにやってきた親友はスーツを着ていた。がやがやと雑多な店内、細身のスーツは光沢があり、彼だけ別世界の人間だった。

『良かった……この頃、会ってくれなかったから』

『……』

楠部はぎゅっと俺の手首を掴んだ。親指で静脈辺りを何度もなぞられた。周囲の音よりも、心臓の音がうるさかった。

『く、楠部、俺っ』

『うん、どっしたの？』

手首をがっちり掴まれた状態で、洗いざらい話した。オンラインカジノに八

マッて、クレジットカードを何枚も作ったこと。

楠部に預かってくれと頼まれた金に手を出してしまったこと……テーブルに額を擦り付けた。

『楠部、ごめんっ。本当にごめんっ。借金がやばくて、だからその』

『——借金、全部でどれくらい？』

顔を上げると、うっとり微笑んだ美男子がいた。目を細めて、今か今かと獲物を待ち望む口は、大きく弧を描いていた。

『三百万……』

『俺が全部、返してあげようか？』

『え……全部……？』

『うん。ねえ、お金、欲しくない？』

白い歯科矯正された歯列から、薄紅色の舌がのぞいていた。楠部の声はいっ

も通りの、優しくて穏やかな声だった。

『欲しい……ほ、欲しいです。お金下さいっ、お金、下さい!』

もっと欲しい。本当はもっとギャンブルがしたかった。スロットを回して当たった瞬間、バカラで賭けが当たった瞬間、お金が倍になるよりも、あの一瞬を欲していた。

再び頭を下げると『じゃあ、その代わりに』と楠部が囁いた。

『俺が望んでいるもの……分かってるよね?』

『……』

『ねえ、古柳?』

『あっ……』

ファミレスのテーブルの下。温かいものが股間にあたる。恐ろしくなりながら下を向くと、革靴を脱いだ楠部の足先に撫でられていた。ひゅっと、喉が締めまり、呼吸がフンテンぽずれた。

『ホテル、行くっ』

『あ、のっ』

『あ、お金、返してからね』

天使みたいな顔をした男が、腕を伸ばした。無遠慮な指が、胸元に這うのを――俺の体は動かなくなっていた。

## 食事

昼間、大東から来たメッセージは短く「今日、空いてるか」だった。

来月のリリースを控え、職場は慌ただしくなっていた。定時で帰れる日など、まず無い。楠部に夕飯はいらないと断っていた。

12:11 空いてない

12:11 一時間も？

12:15 早くて八時には終われるけど

早くて、が叶った日など、過去に片手で数えるぐらいの日数。直ぐに既読が付いた。

12:15 じゃ、エントランスのカフェで待ってる

——そんなやり取りをしたのが数時間前。なんと奇跡が起き、十九時に、エレベーターが一階のエントランスに着いた。

まだ来てないだろうかと、カフェに入った。カウンター席は誰用ですかってクレームを入れたくなる、足がつかないカウンターチェア……で、ゆっくりと足を伸ばすスーツ姿の男が、話しかけられていた。

相手は見たところ、二十代前半。ペラペラの白いシャツと黒いスーツが、就活っぽい感じだった。

興奮しているのか、頬を赤らめて、男に握手を求めているようだった。

「就活、頑張ってるね」

「はいっ、ありがとうございますっ、大東さんっ！」

静かなカフェで、営業ばりのお辞儀をした若者が、通り過ぎて行く。足を氣だるげに組んだ男が、こちらに氣が付いた。

「あれ、早かったな。古柳」

「お前もな……今の」

「あー、なんかこの前の経済誌読んだとかで、コンサル目指してるって」

「ふーん」

大東将——大学時代の同期が、さっと立ち上がった。腕が伸びてきて、コートの襟を掴んだ。

「こんな高いコート買ったなら、襟へら直せ」

「あ……っん」

「どっした？」

大きくてごつごつした指が、コートの襟を整えていく。楠部に買って貰ったコートだった。俺の生活必需品は全て、あいつが用意する。コートは確か、服屋に行つて、採寸された。一目で高いものだ分かるような代物だったとは。

襟を直した男の指が、頬にあたる。たまたまかと思ったら、親指が確かめるように、頬を撫でた。固くて骨ばった指の感触に顔を背けると、ぱっと手が離れた。

大東も楠部同様、帰国子女だからか、大学時代からスキンシップみたいなのが多かった。

「ドイツ料理でいい？安くて旨いんだよ」

「予約とか取ってんの？」

「取ってないけど、俺は入れるから」

「あ、そうですか……」

エントランスの玄関には、タクシーやハイヤーが何台も止まっていた。ビジ

ネスマンが行き来する吹き抜けのエントランスで、大束の姿は目を引いた。

男っぽい、がっしりとした肩に、堂々とした足取り。同年代とは思えない貫禄に、半歩、後を付いて行くような形になった。

安いと言っときながら、連れて来られたのは六本木の店。にこやかなドアマンに迎えられ、店長なのか——こんな店で、店長の呼称は使うのか、無縁だから知らない。偉い責任者らしいおっさんに「大束様」と奥の個室を案内された。

こいつの安いは、楠部の安いと同じくらい、信用できない。生まれつき、恵まれた人生を歩んできた者との圧倒的な断絶を感じる。

染みひとつない、眩しいくらいの真っ白いテーブルクロスに、目を眇めた。

椅子を引かれて、メニュー表を渡されたが、飯の内容が想像できない。ケール野菜のサラダ、ウズラのフルーツ詰め、ウサギ腿肉の赤ワイン煮にマッシュルームを添えて……

「決まった？」

「え、サラダ？肉？」

「……季節料理にしよう」

メニュー表、想像できるのがサラダだけだった。値段が記載されていないから、コース料理、いくらぐらいかと予想する。

頭の中で考えるだけでいい。大束と食事の時、財布を出したことは一度も無かった。

一万円ならガチャ二十連。三万円なら……金額をガチャに当てはめていたら「久しぶり」と言われた。

「シンガポールから帰ってきて……一カ月ぶりか」

「ぐらいかな」

「どうしてた」

「どっつて……」

仕事して、楠部のご飯を食べて、ソシヤゲして、セックスして、朝になる。

毎日のサイクル。代わり映えの無い日常。ふと、日高愛美の顔が浮かんできた。

「……成長が無いな」

答えられないでいると、大東が呆れているようだった。

「でたよ、でた。」

また始まるなーとうんざりしたが、高い飯を食わせて貰えるのだ。食事代だ

と思っ、凝り固まった肩をストレッチした。

「まだ楠部と同居しているのか？」

「うん」

「呆れた。お前もだが、楠部もだ。学生気分が抜けていないのか？」

いつもの説教が始まり、料理が運ばれてきた。前菜は、でかくて丸い皿に、

ちよこんと乗ったサワダ。

某ファーストフード店のかにコロッケバーガーに挟まっている、野菜より少なそう。

もそもそ食べていたら「ぐ乱れた生活を送らないように」とメのセリフ。どうやら説教が終わったらしい。

慣れないフォークとナイフで、ウズラの肉を放り込んでいたら、大束は白ワインを飲んでた。俺にも注がれたけど、ちよっと口を付けて放置。

酒は楠部がほとんど飲まないから、俺は酒を飲む習慣がなかった。

「仕事、いつまで続ける気なんだ」

「えー、いつまでだろ」

日高愛美に会えるから、出勤は楽しい。今日はベストにロングスカート姿で、司書さんみたくて可愛かった。思い出してつい、頬が緩む。誰にも言えないし、本人にも伝える気などさらさらない。日常の囁かな、楽しみだった。

前に座る男がため息をついた、のも様さまになるから、ついまじまじと見てしまった。楠部とは違う、というか正反対の男。

イタリアンスーツを好む楠部は、華やかな美貌も相まって、洒脱な印象がある。だけど大束のスーツ……特徴からブリティッシュスタイルか。重厚感があると聞こえはいいが、大学時代、ボート部で鍛えた広背筋は逞しく、威圧感がやばかった。

顔も柔和な感じの楠部と違い、顔の造りからパーツまで、全部が雄っぽい。がっしりとした顎、粗削りな感じの高い頬骨。彫りが深い、目力のある瞳に見つめられると、補食されたような気分になる。

同僚が男っぽいと言った、野性味のある美貌は、楠部と同じくらい、人を惹き付ける。一緒に歩けば、俺の貧弱さが強調されるような男だった。

「……シンガポールの支社から帰ってきたんだが、どこもAI事業が盛んだな」

「あゝ……なんかまた、起ち上げんの？」

大東も学生時代、起業している。国内に留まらず、アジア圏の国々に注目し、マーケティングやコンシューマー関連の事業を展開するIT企業だ。海外の主要都市に支社を置き、学生時代からぐっと事業が拡大している。

国内の悲惨なITの光、ユニコーン企業と持て囃され、上場した。いつか、大東の資産は百七十億と、ネット記事に書かれていたのを目にした。楠部とい勝負だった。

こんな俺と大東では体格から、その野心むき出しの性格含め、全てが釣り合っていない。

けれど、こうして食事をするのは学生時代、システム開発に協力したからだ。確か三年の時だった、声をかけられたのは。

「お前はどうか考えてるんだ」

「うーん……研究は無量大。ビジネスはまだ小さい……かな」

ディープラーニングだと、世間を賑わせたのは数年前。人の仕事は人工知

能に取って代わられる、仕事が奪われると、不安を煽るような記事が話題を呼んだ。

ブームはひと段落、みたいな空気だが、業界では研究が進められていた。と  
いうか、人工知能はここ数年のぼっと出なんかじゃない。

約六十年の歴史はある人工知能。ブームと冬の時代を繰り返して、今は第三次ブームと言われていた。

「汎用型AIを使って、工業などでの検品チェックを効率化させる——可能か？」

「難しうよ」

大東のビジョンは、今まで幾度となく試されて、AIが躓く問題だった。

「機械学習させてやれそうって思っじゃん。これがすげー面倒なんだよ」

例えばネジを生産する工場で、不良品をチェックするAIを投入しようとする。で、不良品をAIに学習させる——ここが難しい。まず、国内の工場で不

良品が出る確率が少ない。

AIの機械学習には、膨大なデータが必要となってくるのに、不良品のサンブルがほとんどない状態では、学習自体ができないのだ。

「AIへ投入するデータだって、人がチェック付けるんだ……まだAI入れるより、手作業の方がいいよ」

大束は黙って話を聞いていた。ワイングラスがテーブルに置かれると、また白い皿が運ばれてきた。

「実家の工場が、もうじきベテランが引退する……人手が足りないんだ」

「あー……」

以前、大束は実家が工場だと教えてくれた。防犯カメラといった精密機械のパーツを大手企業に卸していると。

「AIに仕事を奪われるんじゃないだよな。穴埋めにならなきゃいけない」

「ああ」

加速スピードが上がる少子高齢化を前にして、AIは恐怖の対象ではなく、希望だった。だけど現実ハリウッド映画に出てくるようなAI——人類を凌駕し、反乱起こしたりするやつね。通称「強いAI」と呼ばれる存在は、夢のまた夢。

汎用型AIにしても、成果を上げる場所はまだ限られていた。

「星新一みたいな世界、まだ遠いよなー」

ここが楠部だったら、小説の話で盛り上がる。だけど学生時代から、上から目線で説教する男は……

「誰だ。星新一って」

案の定な疑問をぶつけられた。

「星新一知らないとかやばいよ。あの星新一だぞ」

「知らない。俺は高校まで、ドイツにいたんだ。日本の作家は……小説は読ま

な」

大東には学生時代、小説とか読んで、何になるんだ？と、面と向かって言われた。

経験が大事、誰もやったことが無いことに挑戦するのが人生だとか、もう言葉の節々から、野心と向上心が溢れ出していた。

二十代後半になっても相変わらずで、こつてりした料理に、ぎらぎらした欲望。俺はこの同期に苦手意識があった。

デザートのスフレみたいな(メニュー表の名前を忘れた)のがきて「有意義だな」と大東が言った。

「は？何が？」

「お前はいつも冷静な指摘をくれる……おかげで思考が整理される」

「……そう？」

俺が？冷静？大東は技術的な知識を持たなくても、頭が良いから理解するのが速いんじゃない？決して、俺の話が分かりやすいとかでは全くない。そう言っ

ても、大東は首を横に振った。

「お前は能力がある」

「……ども」

「だからそろそろ真面目になれ」

危うく、デザート用スプーンを落としそうになった。俺がこいつを苦手な理由。もう一つあった。

「……漱石」

「なんだ？」

夏目漱石の「虞美人草」という有名な小説がある。今は亡き、外交官だった父親を持つ甲野が主人公ではあるけど、注目されるのは妹の藤尾<sup>ふしお</sup>。

美しく、教養のある藤尾は、家庭教師として雇われた、優秀だけど苦学生の小野さんを好きになる。でも彼女には、父親が決めた許嫁で、甲野の親友、

むねちかはじめ  
宗近 一 がいて……ざっくりしたあらすじなんだけど、俺は作中に出て

くる宗近って男が嫌い。

藤尾も相当だけど、宗近には胸がざわつく。こいつは外交官の試験に落ちて浪人中の身だけど、飄々としている、主人公の良き理解者ポジション。

ナイーブで頼りない甲野とは正相反な性格をしている。旧来的な「男らしさ」を漂わせたマッチョな男、宗近。

だから藤尾は宗近を、教養がないと嫌っているけど、宗近は藤尾との結婚に執着している奴なのだ。サバサバした風を装いながら、藤尾と小野の仲を引き裂こうとするサイテー野郎。

こいつが小野に向かって言うセリフが「真面目になれ」。

大東の「真面目になれ」と宗近の「真面目になれ」。意味は全く違う。違うけど、宗近みたいな男らしさを纏う大東に言われたら、心臓に悪い。

「お前、いつもそう言ってくるよな」

大東が本なんて、読むわけ無い。なのに、彼の鷹揚さは宗近を彷彿とさせた。

「当たり前だろ。いつまで怠惰な生活を続ける気だ？向上心を持ってよ。お前にしかできない仕事があるんだ」

「いや無いから」

「め」

うぜ〜。でかくて長い腕を振り回しながら、成長、向上心、上を目指せ云々かんぬん。デザートを食べ終えて、満腹感で眠たくなっていた。

大東は訴えかけるような顔をしていたが、躊躇うように唇を噛んだ。

「古柳……もう、借金とかないよな？」

「……うん」

(消費者金融の) 借金は無い。楠部が学生時代、精算した。あれから誓約書にサインして、楠部のブラックカードを渡された。毎月、カードからいくら引き落とされているのか、把握していなかった。

大東は上っ面の返事を信じ込んだのか「よかった」と笑った。うろたえる姿

など、見たことがなかった男の、気が抜けた笑顔だった。

「楠部と同居してるだろ？お前が本来、真面目な人間だとは、もちろん分かっているが」

「ああ。俺が楠部に寄生してないか、心配だった？」

うん、そうだよ、とは言えないか。大束は眉根を寄せていた。無神経な奴ではない、ただ正義感が強いだけ。

でも言ってくれば良かったのに。

そうだよ、寄生虫だよ。

毎月いくら、楠部の金を使っているのかも分からない。ギャンブル癖はオンラインカジノからソシャゲに移り、毎日ガチャを回している。

ソシャゲでレアキャラが出た時の高揚感。あれはカジノで大当たりした時の、あの幸福感に似ていた。

ゲームに夢中になっているのか、ガチャを回したいのか……多分、後者。

「古柳。俺は、人はいつでもやり直せると思っているんだ」

「ああ、うん」

「お前は本来真面目な性分で、心が弱い人間でもない。やればできるんだ」

「ああ、分かったよ」

大束は出来の悪い生徒に発破をかける——中学校の指導教員か？起業家になつていなかったら、教師になつていただろう。

目を輝かせて「やり直せる」と念押しするよつに言う。俺は食べ過ぎたのか、胸焼けを起こしていた。

「俺が、お前を救ってやるからな」

熱を帯びた視線が、暑苦しくも頼りがいはあった。新しい事業でも起こすのかと、俺は気軽に頷いた。

レンタルルーム

花の金曜日。今日は飲み屋が集中する駅は、人が溢れかえっているはず。だ  
けど俺は、人気の無いオフィスにいた。

気が緩んだ顔付きのサラリーマンと一緒に週末を楽しめないのは、帰り際、  
障害が発生したから。

泣きたい気持ちで、定時後の打ち合わせに顔を出したら一時間後。今度はス  
ケジュールの立て直しと呼ばれて、気が付いたら二十一時を過ぎていた。

慌てて、楠部に連絡した。今日の夕飯は白身魚のフライだよと、朝の出勤時、  
見送られた。

ごめんと謝罪し、今日は遅くなるとメッセージを送信した。

既読は付いたけど、反応なし。あっちも忙しいから、当たり前だよな。同じ

batch開発チームのメンバーが帰宅する中、二十三日。PCのシャットダウン

直前での更新プログラムがやっと終わり、エレベーターに乗った。

朝だったら人でいっぱいになるエレベーターには、誰も乗ってこなかった。

スムーズに、一階に着いたら、エントランスに背の高い男が立っていた。

「聰一郎……」

「お疲れ様」

人気の無くなった吹き抜けのエントランスで、楠部が帰りを待っていた。着ているコートにそっと手を伸ばすと、冷たい。

「何時間ぐらい待ってた？」

「一時間ぐらい……あつという間だったよ」

朗らかに笑うので、こっちが申し訳ない気持ちになった。

「仕事、忙しくなってる」と、つい言い訳がましい口調で、急に打ち合わせが入ったことを話した。

警備員さんぐらいしかいない、静かなエントランスを二人で歩いた。そっと

手を握られて——同僚に見られたらと、いつもだったら自意識過剰になるけど、

人いないしね。冷たい手を握り返すと「朔の手、温かい」と上擦った声が返ってきた。

「良かった。本当に仕事だったんだね」

「？」

「この前、仕事が早く終わったのに、帰りが遅かったから」

楠部の言うこの前は、大束と食事をした日だった。サーッと血の気が引いた。

あの日、大束と六本木で別れて、電車に乗った。マンションに帰り、仕事が長引いた、食事は外で済ませたと行って――

「どこに寄り道していたの？」

「……飲み屋に入って、ダラダラしてたんだよ」

どうしてか、大束との食事は話せなかった。楠部がどこで退勤時間を知ったのか……疲れた頭では考える余裕もなかった。

これ以上、追及されたくない気持ちから、「飯、食った？」とあからさまに

話を変えた。

「まだ」

「そっか……じゃあ、どこか飲み屋に入ろう」

隣を歩く楠部は、黙っていた。握っていた手の力が強くなって、指を絡めるつなぎ方になった。

「あー……どっするっ」

「泊まりたい」

「え」

「明日、休みでしょ？」

美しい顔を傾げられて、同性の俺でもドキツとするから、美形は凄い——と

思った瞬間「朔とセックスしたい」と、明け透けなことを言われて閉口した。

「セックスしたいよ。もう外でもいいけど」

「……俺は凍死したくないから」

サラリーマンの街とか言われる周辺には、カプセルホテルが多く、後は外国人観光客が止まる、高級ホテルがいくつも建っていた。

金曜日だ。飛び込みで、部屋は空いていないだろう。スマホで検索をかけていたら、レンタルルームが出てきた。ごく丁寧に、ラブホテルの代わりとして、充実したお部屋になっております、の謳い文句付き。

「ここ行ってみる？」

「うん」

駅近くの立ち食いソバで夕飯を済ませ、レンタルルームを探した。駅の西口、でかいパチンコ屋を通り過ぎ、飲み屋が並ぶ路地に入った。

一件目、満室。二件目も満室。レンタルルームは立て看板から小さいなビルと様々で、ちょっと外観が古びた三件目を見つけた。

入るとロビーは清掃が行き届いているのか、カプセルホテルと変わらない印象を受けた。一部屋、空きがありますと言われて、上機嫌な楠部が鍵を受け取った。

お二人様、二十三時から翌朝十時までのナイトパック、七千円と説明を受けた部屋は、男二人でちょっと狭いかなと思う部屋だった。

「面白いね」

「そー…だな」

楠部は誕生日や記念日（俺が誓約書にサインした日）に、ホテルを予約する。泊まってもセックスするだけなのに、わざわざスイートを取って、花とかプレゼントするんだ。

逆に新鮮なのかと、コートをハンガーにかけた。

ダブルベッドに、壁には薄型テレビ、作業机にシャワー、トイレと、一泊するには十分な部屋だった。机の上に置かれたテレビのメニュー表を、何気なく

手に取った。あ、AVがある。

「朔」

「ちよっ」

後ろから押し掛かるようにして、ベッドに押し倒された。メニユー表が吹っ飛んで、床に落ちた。

「おまつ、おい、シャワー……っん」

振り向いた拍子に、口づけられた。口を塞ぐようなキスだった。滑らかな舌が入り込み、口腔を荒らされる。

スプリングが揺れて、服がこすれ合う音に、心臓がどくどく音を立てていた。股を割るように楠部の長い脚が侵入して、絡み合っていた。

「——ね、覚えてる？」

「っ、んっ、なに、が」

「初めての日。新宿で入ったホテル、こんな感じだったよね」

楠部は熱に浮かされた表情をしていた。反対に俺は——今でも思い出すと、どこで自分達の関係はおかしくなったのか、自問する記憶だった。

——あの日、ファミレスを出ると、楠部は俺の腕を掴んだまま、タクシーを呼んだ。行き先は新宿。腕を離して欲しいとは言えなかった。

言ったら、借金を返して貰えないかもしれない。

タクシーが新宿に到着すると、楠部は確かな足取りで、自動契約機まで歩いた。タクシーの中で熱心にスマホを見ていたのは、検索をかけていたからだ。ろく。

楠部は自動契約機の五十万をさっさと清算すると『外に出よう』と言った。

視線を落とせば、白線が消えかかった灰色のアスファルトを歩く、チョコレート色の革靴と履き潰したスニーカーが並んでいた。

人工甘味料の匂いと、誰かが吐いたのか、饅えた吐しゃ物の臭いが、鼻腔を

掠めた。

新宿について、何分経った？あまりにもあっけなく、借金が片付いたところで『はい、これで大丈夫』と言った。

ちらりと頭にもげたのは、残りの二百五十万。でも五十万円を肩代わりして貰えたのだ。

『楠部、ありがとう』

『残りはホテルに行った後ね』

ぐいぐい腕を引っ張られて、新宿の繁華街を歩いた。平日の真っ昼間、午後  
の授業、代返頼んでないとか、これから起きることを想像して、口の中がから  
からになっていた。

『ふう、空いてそう』

楠部が立ち止まったのは、壁に料金表がかけられているホテルだった。引き  
ずられるように入ると、楠部が空いている部屋を取った。

『く、くすべつ、待って、まつ』

部屋に入った瞬間、でかいベッドが目に入った。内装を確認する間もなく、白いシーツに突き飛ばされた。

『んっ、んん……』

慌てて振り向くと、唇を塞がれた。生まれて初めてのキスが、借金の代わり。舌でちろちろと舐められて、堪らず口を開けると、ぬるりと侵入してきた。

キスって、もつと胸が高鳴るようなものだと思っていた。それが親友に押し掛かれ、心臓がはち切れそうだった。

『……んっ、あ……』

ファーストキスはレモン味とか、可愛いものじゃない。口の中を蹂躪するよ  
うに、動き回る舌。指一本動かせないでいると、胸元に冷気を感じた。

いつの間にか、楠部がシャツのボタンを外していた。すると蛇のように  
移動する楠部の指が、俺の乳首にそっと触れた。

『…っう、楠部、まつ……風呂、入りたい』

『……そうだね』

乳首を弄られて、むず痒い感覚に体を捻った。気持ち良くなんかない。ただ楠部は違った。いつもの、温和な笑顔はどこかに消え、追い詰められた顔をしていた。

ちらつと下腹部を見たら、股間がテントを張っていた。鬼気迫る顔をした楠部に、シャワー室まで引っ張られた。

『なか、洗わないとね』

なか？なか？……単語の意味を飲み込めず、ぼんやりしていたら、またキスをされた。

『んっ』

『可愛いね、朔は可愛いよ』

服を剥ぎ取られ、かちやかちやとベルトを外された。楠部は『朔の』とうっ

とりした顔で、何度もジーンズ越しに、股間を撫でてきた。

『朔の全部、俺のものだよね』

あるうことか、親友は美しい顔を俺の股間に寄せて、頬ずりし始めた。

『いっここでしゃぶりたいなあ』

惜しむような口振りと『しゃぶる』に衝撃を受けた。顔が整い過ぎて、性のおいがない、美しい親友だったはず。仮面が剥がれ、剥き出しの『雄』になっっていた。

『えっ…あ、な、なに』

『なか洗うって言っただろ』

男二人では狭く感じるシャワー室。全裸になり、楠部が抱きしめてきた。ガリガリの俺とは違う、適度に筋肉が付いた、彫刻みたいな体だった。

『あっ…わ』

同性とは思えない、人間離れた美貌と美しい体……惚れ惚れするより、怒張した男根に、目が釘付けになっていた。中央にそそり立った、生々しい赤黒い肉棒。血管が浮いたそれは亀頭が張って、恐怖で足が震えた。

親友が、俺に興奮している。

勃起したペニスに事実を突きつけられて、恐ろしさのあまり、体を離れた。

怖い。やっぱりやめたい。真面目に働いて――

『朔、優しくするから』

『っ……っ』

逃げ腰になった俺の、腕を掴む指が痛い。ぎりぎりど皮膚に食い込むそれは、

穏やかな声とは裏腹に、殺気すら感じた。

『ね、朔』

『な、なに』

『キスは経験ある？』

どうしてそんな残酷なことを聞くのか。さっきベッドで俺の口に食いついてきた男は、だらりと垂れた、俺のちんこを握ってきた。急所を、他人に掴まれている。恐怖なのか、楠部と同じくらい息が荒くなった。

『……ない』

『じゃー、こんなことするのも、俺が初めてなんだね』

『あっ、あっ、あぁっ』

硬いちんこを擦り合わせられ、恐怖に快感が混じってきた。熱いシャワーを被りながら、ゆっくりとペニスを扱かれる。

『気持ちいいね』

『あ……はっ……あぁっ』

『手、合わせて』

片方の手で導かれて、重なり合った男根に触れた。勃起し始めた自分のペニ  
スと、楠部の硬い凶器を擦り合わせた。指が絡み合い、カウパーが滲んでいた。

もうちょっと、もうちょっとでいける。

『あっ! つゝゝなこ?』

『ここほぐ解さないと』

臀部を辿り、楠部の指が、尻のすばみに触れた。ぬるつとした、変な感触に、  
腰が引いた。

『このまま俺の挿れたら、裂けるから』

『ひっ』

『あー、きついなあ』

指がやわやわと筋肉を解すように、這い回る。得体の知れない感覚に、体が  
震え始めた。

『最初は気持ち悪いよね。でもね、慣れたら良くなるから』

『あつ、い、つう』

『朔のここに指入れるのも、突っ込むのも、俺だけだからね』

『あ……、ああ！』

第二関節まで入った指を、くいつとなかで折り曲げられた。瞬間、目の前で星が飛んだ。

『ああつ、んあつ、く、楠部、そ、そこやめ、やめ、て』

『気持ち良くなるから？』

指を二本、三本と増やされて、俺はたまらず壁に肘を付いた。楠部に尻を突き出す恰好で、シャワー室で腰を振った。

そのうち、楠部の口数が少なくなり、また腕を引っ張られた。シャワー室を出ると、乱暴にバスローブを被せられ、ベッドに押し倒される。乳首を吸われながら、勃起したのを弄られた。

射精する瞬間、足を割われた。楠部は右手に持った小さな銀紙を開けた。なんだろうと、射精した直後の頭で見上げていると、半透明の丸い……

『コンドーム？』

『うん。初めて見る？』

経験もないし、好奇心で買ったことも無かった。ベッドで腹を精液で汚した俺は恥ずかしくなって、頭を振った。楠部は慣れた仕草でコンドームを付けるのと、俺の太ももを掴んだ。

『朔は可愛いね』

ああ、挿れるんだと、絶望的な気持ちで、上を見上げた。ここで嫌だって言ったら……金を返して貰えない恐怖が勝った。

親友は興奮しているのか、俺の上で息を乱しながら『可愛い』を繰り返していた。

『……あつ、いつ、ああつ』

『きつっ……』

楠部が侵入して……快樂など吹っ飛ぶ苦しさだった。硬くて暴力的な熱棒にじわじわと侵入される。息ができない。楠部の凶器に串刺しにされた俺は、ベツドで口をパクパクさせていた。

『朔に挿れてるんだ』

『あ、まつ、まだ、うご、かない、で』

『俺が挿れてるんだよ。朔、俺の顔を見て。朔に突っ込んでる男は、俺だけだ

ト

俺の上に乗っかって、腰を振る楠部は恍惚としていた。

『あ、ああっん、あ、あ』

そこから記憶は曖昧で、目が覚めると、楠部が前髪を梳いていた。

冷たくて、細長い指。これがさっきまで俺のなかを弄り回していた……意識

したら、顔が熱くなった。

楠部は『朔』と下の名前を繰り返して、頬を擦り付けたり、キスをしたりと、まるで恋人の仕草だった。

おかしいだろ。俺は三百万の借金の代わりに、体を売ったのも同然なのに。

楠部は『可愛い、大好き』と抱きしめて、足を絡ませた。まだやるのかと、内心の怯えを見透かしたのか『くっついてるだけ』と囁いた。

『今、俺が世界で一番幸せ』

ピロートークなのか、楠部は大袈裟なことを言う。俺は借金が無くなったことに安堵していた。

『朔、愛してる。君だけだよ、こんな気持ちになるの』

『……ありがとう』

『君の全部が好き……朔は？俺のこと——』

「好き？」

「——っ」

体面座位で、体を揺さぶられた。こうすると楠部の長大なものが奥にあたって、気持ち良かった。

「あっ、あっ、ああ……っ」

「ねえっ、好き？ちゃんと答えて」

レンタルルームの簡素なベッドは、スプリングがよく揺れた。がくがく揺さぶられて、俺は口の端から唾液を垂れ流していた。

「すっ、す、しゅき、お、奥、突いてっ、ぐりぐりし、てっえ」

突かれると、内襞が楠部を締め付けるのが、自分でも分かった。俺の腰を支えて、下から突き上げるようにする楠部の顔が歪む。

もっと、もっと、奥にある、脳天にくるような快楽を生み出す場所。硬い凶器に、めちゃくちゃにされたかった。

「お尻振って、朝はこれが好きだね」

「うんっ、しゅきっ、あんっ、すきいっ！」

「なにが？なにが好きなの？朔は」

楠部は俺に、下品なことを言わせるのが好きだ。小説は好きな癖に、下ネタは苦手の俺が顔を赤くするのを楽しんでいた。

「そ、聰一郎のお、おちんちんっ…あっん、っちんちん、ケツまんこでぐちゃぐちゃあ、好きっ！」

「俺も好きだよ」

ぐ寝美のように下から腰を突き上げられて、体に痙攣が走った。ぐっぷりと深く、突き刺さった怒張が、なかで暴れ回っていた。

「あ、あんっ、もっと、もっとお」

腰を振り立てると、乳首をつねられる。ますます唾液が零れ落ちた。気持ちいい、気持ちいい。突っ込まれていれば、快樂で何も考えずに済んだ。

「もっと気持ち良くしてあげる」

「あっ」

仰向けに寝かされ、腰を掴まれた。奥まで刺し込まれた怒張が、浅い場所を責め始めた。

「うん、ああっ、あんっ」

「俺達、体の相性もいいんだよ」

浅い抽挿が繰り返されたら、一気に奥まで突きたてられた。俺のペニスから——何度もいかされて、薄くなった精液が、じくじくと溢れ出した。

「ねえ、俺のこと、好き？」

俺の上で息を乱す男は、同じことを何度も聞いた。確かめるような「好き」。

俺はうわ言のように繰り返した。

「っ、好き、好きい」

……楠部と新宿のラブホテルでセックスをした日。

あいつは誓約書を出してきた。今後、金は楠部以外の者から借りない。俺に彼女、または結婚した時に返済する。読んで体が強張った。

これにサインしたら、もう楠部から逃げられないような気がした。

だけどいくらでも金を貸すと言われて『我慢できるの?』とベッドで囁かれた。

『もうやめるって禁止にして、後で反動がくるかもしれないよ?』

『……』

『無理じゃなくていいんだよ……お金はいくらでもあるからね』

甘くて、どろどろに溶けてしまいそんな睦言が続いた。俺にこの先、彼女とか、結婚できるわけないし……一生独身だったら、楠部に金は返さずにずっと『サイン、する……』

美しい男は、目を細めていた。抱きしめられている間、ずっと『愛してる』と言われた。

それから、楠部との友人関係は歪んだ。ブラックカードを渡され、会うたびにセックスしていた。

体に負担がかかるからと、マンションに泊まれと言われて、連泊するようになった。大学から帰れば、楠部の部屋でスマホを開く。彼の部屋に入り浸るようになっていた頃。

オンラインカジノを教えた篠田と、冬休み明けの講堂で会った。

『古柳、久しぶりじゃん！』

『おー、篠田も焼けたな』

聞くと、親が移住したオーストラリアで、年末年始を過ごしていたらしい。

『オーストラリア、カジノあってさー、あーどうだよ、儲かってるか？』

『えー……』

他の友人達は、ギャンブルの類は一切、やっていなかった。篠田なら『馬鹿じゃねえの！』と笑ってくれると思った。そうすれば、楠部の金を浪費する罪

悪感のようなものが軽くなるって……借金したとごぼした。

『……はっマジっ……古柳』

篠田の顔から表情が無くなった。しまったと後悔した時には遅かった。

『自分の範囲で楽しむもんでしょ、ふっー』

『あ、そくだよ、ね……あの』

『自制心ねーの、お前』

吐き捨てるように言った友人は、講堂を出て行った。

それから噂が広まるのはあつという間で、俺は悪い意味でキャンパスの有名な人になった。

ギャンブルで多額の借金をしている、サラ金に手を出した、内臓を売った……

……根も葉もない、笑うような噂が真実だと扱われた。それは俺が違うと否定しても、話を聞いてくれる友人がいなくなったから。

でも当たり前だよな、奨学金じゃないんだ。まともな神経をしていたら、ギャンブルで借金を作った友人など、縁を切る。

大学内を一人で過ごすようになった。同時に、楠部のマンションに、俺の私物が増えていった。

## 缶コーヒー

ブルーマンデーと言われる、一週間の始まり。

デスクで朝のチェックといえば、メール。開いたら早速、障害検知の報告がきていた。

文面を読む前に、テンションだだ下がり。でも仕事だと、嫌々読んだ。メールには、オーソリ(オーソリゼーション)でうちからクレジットカード会社に送るオーソリ処理に、エラーが出ているとあった。

オーソリ処理で動くのは、深夜帯のbatch……処理が上手くいかず、クレジ

ットカード会社からのオーソリ結果を受け取れなかったとあり、後続ジョブの影響を考えて冷や汗が出た。

やべえとデータベースを覗きに行こうとしたら「古柳さん」と声をかけられた。同じプロジェクトチームの、日高愛美の上司だった。

この人が、俺をさん付けで呼ぶのは、必ずトラブルっている時。難しい顔で腕を組んでいた。

「会議室2で、至急ね」

「すぐ行きます……」

……打合せの結果、先々にリリースしたbatchと、オーソリ処理を行ってInbatchの分岐処理に差異があり、エラーが出ていることが分かった。

これで、エラーになったところのbatchを修正して、テスト、再リリースすればOKって話になったんだけど、そこはプログラミング言語がCOBOL。

「じゃー、古柳さん、対応お願いします」

逃げ出したい気持ちを抑えて、いつものへらへら笑いで「はい」と返事をした。

COBOLは六十年ぐらいの歴史があるプログラミング言語だけど、もはや化石とか言われるような言語だった。

年齢的に四十代でCOBOLをやっている方が少数派。だから今の二十代とか、まだCOBOLあるの?!と驚愕するレベルなんだけど……金融や銀行関係で、COBOLはまだまだ現役だった。

日高愛美の上司はCOBOLができるけど、影響範囲の対応に追われて、手一杯。一応勉強しとくかと、習得していた俺に、白羽の矢が立ってしまった。

ソースを修正しながら、テストパターンをExcelに書き出していく。作業に集中したいのに「古柳さん」と入れ替わり立ち替わり、人に呼ばれて、打合せが続いて……会議室からの帰り、壁の時計を見たら、二十一時。

夕飯どころか、昼飯も食べていなかった俺は、エントランスのカフェに走っ

た。

ギリギリ滑り込んで（迷惑な客）、サンドイッチをテイクアウトすると、エレベーターに乗る。楠部に連絡していると、あっという間に二十四階に着いた。

上長は会議続き、リリースを任されていた室田は終わったから帰ったのか、

姿が見えなかった。デスクで一人、サンドイッチを食べたらさっさと残りの仕

事を――

紙袋を開けていた時、「古柳さん」と声をかけられた。

え。

「日高さん？なんで、まだいるの?!」

二十一時。新人の日高愛美が、まだデスクに残っていた。驚き過ぎて声を上げると「あの……」と目が潤んでいた。

「ぶ、ぶどうしたの?」

「すみませんっ……仕事が残っていて」

頭を下げられたが、彼女は新人だ。できることは限られているんだけど。

「あの、テストパターンの結果をマクロで集計するようについて、言われてて…

…マクロが組めないんです」

「あー……みんな忙しかったからね。教えてもらえなかった？」

「いえ……それが、教えてもらったのにできなくて」

泣きそうな顔で言われて、俺は紙袋を差し出した。

「きつかったね……ご飯食べてないよね？これ良かったら」

腹が音を出して主張してきたけど、脇腹を抑えて黙らせた。

「……これ、古柳さんの分じゃあ」

「あく、なんか食欲無くしてて……あ、全然食べてないから、大丈夫だよ。取り敢えずこれ食べてー、うん、マクロ教えるから」

「……いいんですか？」

「うん、隣の室田さんの席にパソコン、持ってきてくれる？一緒にやったら早  
いから」

泣かれると冷や冷やした俺は、できるだけ優しい声を出した。こんな時、な  
んて慰めれば良いのか分からない。

疲労困憊の頭を振り絞って、食べ物をあげようと雑な結論に至った。

それから隣に腰かけた日高愛美に、マクドを教えながら、自分の仕事を片付  
けた。時々、彼女の様子を伺いながら、質問に答えること一時間。

デスクに何か置かれる音がした。画面から顔を上げると、日高愛美が缶コー  
ヒーを置いていた。女の子に、義理子ヨコだって貰ったことがなかった俺は、  
心臓が口から飛び出すかと思った。

目が合うと、普段から可愛い彼女が、十倍は可愛くなる笑顔を見せてくれた。

「お疲れ様です。あのっ、テスト結果、まとめられました！これ、良かったら  
……」

「氣い遣わせてごめんね。今日はもう帰って大丈夫だよ」

そう、彼女は気を遣ってくれたんだ。調子に乗るなよと、叱咤する声が脳内に響く。それでも心臓がうるさくて、そっと缶コーヒーに手を伸ばした。温かい。日高愛美からのプレゼント！缶コーヒーを抱きしめなくなった。

「あの……」

残業の疲れも吹っ飛び、内心ウキウキしていると、彼女は何か言いたげに、こちらを見ていた。黒目がちの大きな瞳に見つめられて、好意があるから照れ臭くなった。

「……相談したいこととかあったら、いつでも言ってね」

でも彼女は俺のことが好きとか、まず天地がひっくり返るくらいあり得ない話で。先輩として、まあ嫌いじゃない、程度だろう。

キモイ下心とか見えないように、軽い感じで相談と言った。声、ひっくり返ってなかったよな。

「古柳さん……」

日高愛美の目から、ぽろっと涙がこぼれ落ちた。

やばいー

「あ、ちょっと、休憩！休憩室行こっか！」

障害が起きれば、調査して原因追及。でも目の前で女の子に泣かれたら、どうすることもできない。

休憩室まで行き、椅子を勧めた。日高愛美が落ち着くまで待っていたらー  
「ありがとうございます」とかすれた声だった。

慎重に聞き出すと、室田に教えられたが、上手くできず、また周囲が忙しそうでうだつたため、声をかけられなかったと話してくれた。

大丈夫だよ、分からないのは当たり前だから。同じこと、何回も聞いていいんだから。こっちが、ほったらかしにしてたのが悪いんだよ。日高さんは頑張りすぎるー思いつく限りのフォローを喋っていたら、涙目で笑顔を見せられた。

「古柳さんって、なんでもできて、周囲に頼られてて、尊敬してます」

「頼られてるわけじゃないよ。使われてるだけだって」

「そんなことないです！古柳さんがいなかったら、この現場回ってません……」

私、こんな人になりたいって考えた時、古柳さんが思い浮かぶんです」

丸い瞳は輝いて、白い頬は紅潮していた。彼女が顔を動かすと、黒髪からちらりと、パールのピアスが見えて、胸が高鳴った。

可愛くて、仕事熱心で、でも思い詰めてしまう後輩に、こんな人になりたい、尊敬してる……頭の中で反芻した。

夢でも、俺の妄想でもない。

「そんな、ない、ない！お世辞でも、ありがとうね」

「お世辞じゃないですっ古柳さん、かっこいいのに優しく……モテそうだな

あつて」

「なに言ってるの。モテるわけないじゃん」

日高愛美の口から繰り出される、称賛の数々。体が熱い……いやいや、勘違いすんな。仕事手伝ったから、お世辞言ってくれているだけだ。

それに彼女は以前、楠部の彼女になりたいと、はしゃいでいた。俺はただの先輩。そこらへんにいる、同僚A。楠部のような経済力も、人目を惹く容姿も無い、平凡な人間。

油断したら緩んでしまっ口元を引き締めた。

「えー、古柳さん、お付き合いしていらっしやる方とか？」

「えっ……と」

どういう意図で聞いているの？雑談？恋人の有無を聞くのは……俺が気になっっているから？

まさか

まさかね

勘違いするなど、頭で警鐘が鳴る。それでももしかしたらと、期待がもたげ

た。

「いない、かな」

「えー、モテそうなのに」

ピンク色の唇から繰り返される「モテ」。もしかしてだけど、いや、有り得ないけど、日高愛美は俺のこと、ちょっとはいいなって……楠部の顔が浮かんで、心がすうっと冷えた。借金の代わりに、セックスした友人。同居して、飽きもせずほぼ毎日やっている。

あいつはセフレだ。恋人なんて甘い関係じゃない。楠部が囁く「好き」を頭から打ち消した。

「いないいない。モテない人生歩いてきたから……日高さんは？」

「えー、いませんよお、全然モテないんです」

可愛いのにね、とど元まで出かかった言葉を飲み込む。セクハラだ。

「そうなんだね、意外だなあ」

心の中でガッツポーズをした。

――二十三時近く、日高愛美と別れ、オフィスを出た。駅の改札に向かおうとしたところ「古柳？」と、声をかけられた。

今日で何回目だよ。振り向いて、あっと声が出た。学生時代、オンラインカジノを教えた旧友の篠田だった。スーツに革靴、黒いコート。自分と似たような、勤め人の恰好をしていた。

「久しぶり！」

「何年ぶりかあ？古柳、職場こちら辺なん？」

酔っぱらっているようで、かなり酒臭かった。仕事の話を経くして、名刺を取り出す。

「近いじゃん！俺、ここで開発」

交換した名刺には、ここから十分ほど歩いた、CMでよく耳にする医療機器

メーカーの名前があった。

「今まで会わなかったのが、逆に不思議だなー」

「だな」

「お前も真面目に働いてんならさ、もうギャンブルとかハマってないよな？」

旧友の言葉に心臓が音を立てた。曖昧な笑みで、誤魔化した。

「まあ……普通に働いてるよ」

「なに、古柳フリーランス？」

「え、いやいや、客先だよ」

名刺を交換したのに、篠田は妙な質問をする。酩酊して名刺の文字、見えなかった？ 充血した目に穴のあくほど見つめられて、沈黙が降りた。

「あ……どした？」

「なんかすげー身なりいいな」

「……え？」

「コートとか、靴。客先常駐って、結構もらえんの？」

「や、別に、そんな……」

大束にも似たような指摘を受けたことを思い出し、顔が引き攣った。セフレに整えられた身なりを指摘されると、後ろめたい気持ちになる。元々薄かった服や装飾品への興味は、楠部との同居で消失した。あいつが愛好するブランドで服や時計、靴、下着……身に着けるもの全てを揃えるから。

あれが着たい、これが欲しいと言ったことはない。興味がないし、それに俺はセンスないから、任せるよと言えば、楠部の機嫌が良くなる。

「へえ、アウトレットとか？」

「あ、まあ、うん……」

「やっぱり学生の時とは違うな―」

赤らんだ顔が、感心したように頷いた。

「ま、じゃあ、今度飲もーぜ」

「おー、引き留めて悪かったな」

それじゃあ、とへべれけになった旧友に別れを告げた時だった。何かを思い出すように、上を見上げていた篠田が「楠部」と呟いた。

「お前、もうあいつと付き合いがないよな？」

「……なんで」

なぜ、ここで楠部の名前が出るのか。

改札に向いていた足が、地面に縫い付けられたように、動けなくなった。深夜近くになっても、何本も電車が通る駅地下は、人の行き来が激しい。疲れか、蛍光灯の光が眩しかった。

「えー……あいつさあ」

旧友は落ち着かないのか、視線がきよろきよろしていた。まるで何かを警戒する仕草だった。

「なに？」

「あー……ちよっと、どっかで、あ、お前、腹減ってね？そこで、飲みながら

話そーぜ」

旧友が指したのは、居酒屋チエーン店の看板だった。

## 起業

誓約書にサインしてから、俺の怠惰は輪をかけて酷くなった。

自分の金はすっからかん、友達もない、楠部のゆっくりしてね、に甘えて、だらだらとマンションに寝泊りしていた。これじゃあ駄目だと、自分のアパートに戻って、三日が経った。

四畳一間の狭さに息苦しさを覚え、文庫本を持って、公園近くの川辺を歩いた。春休みだから、大学に行かずに済むのが救い。歩きながら背伸びをした。

何気なく、ジーンズの尻ポケットに突っ込んだ財布に触れる。楠部がくれたブラックカード。なんでも買える、なんでもできる、魔法のカード。

これで借金に苦しまずに済む……胸のざわつきが抑えられず、俺は適当な土手に寝っ転がった。

誓約書にサインをしたら、いくらでも金を貸すと言われた。その証拠に魔法のカード。これでもう、オンラインカジノで何回スロットを回してもいいし、何回ポーカーに負けても、気にしない。いくら使っても、消えない金。

これで何度もあの、ギャンブルの酩酊感みたいな興奮が、味わえる。

喜んでいる反面、楠部の顔が浮かんで、口の中がざらざらした。

『かわいい』

『好き、好きだ』

『愛している。朔、大好きだよ』

楠部のマンションには、ゲストルームがあるのに、俺達は同じベッドで寝ている。楠部が望んでいるから。彼の睦言に、俺は『うん』と返事をする。

『朔は俺のこと好き？』

『うん』

お決まりのようになったやり取り。それでも楠部は、顔を綻ばせて、抱きついたり、キスをする。俺は楠部が好き……？

本を貸し借りし、夢中になって語り明かした友人だから。

いつも十万円をくれたから。

借金を返してくれたから。

彼を好きなのかと自問しては、見えない答えから目を逸らす。ブックカバーに包んだ、夏目漱石の『虞美人草』をパラパラと捲った。

暑くない、寒くない、ちょうどいい気温。お花見日和だからか、公園に植えられた桜の木の下には、青いブルーシートが敷かれていた。

家族連れや同じような学生集団から喧騒が聞こえて、俺は葉を挟んだ——藤尾達が、博覧会に出向いたシーンを聞いた。

『虞美人草』に出てくる登場人物達は院生だったりして、歳が近い。遠い昔っ

て言っても、百年前ぐらいの学生グループが変わらない行動をしていると、共感する。確か、漱石の『三四郎』も大学に入学した青年を書いていた。

時が経った小説の中に、今と変わらない普遍的な日常を見つけるのも好きだった……わいわい複数人で出かける友達とか、俺にはもういないけど。

土手に寝っ転がって文庫本を捲っていたら、デカくて統率が取れた掛け声が聞こえてきた。

起き上がって川を見ると、スーっとボートが、通り過ぎて行く。てか早い。めちやくちゃ早い。ボートに乗った数人が、もの凄い勢いで、漕いでいく。目で追っていたら、あっという間にボートが小さくなっていった。

社会人？どっかの大学？気になって、スマホを開いた。検索エンジンに公園、川名、ボート部と打ち込んだ。自分とこの大学だった。ボート部とかあったのか。知らなかった。

ちよっと調べて、興味が薄れた。読書を再開すると、時々、強い風が吹いて、

桜の花びらが舞ってくる。

自販機で飲み物でも買おうか……小銭、一円も持っていなかった。

気を取り直して読書が続けていると、ふっと影ができた。曇ったのかと、文庫本から目を上げると、男が立っていた。

タンクトップと短パンみたいな水着には、ローマ字でOtsuka……大塚？大

束？調べたから、多分同じ大学。でも見かけない顔だった。

うちは理系と文系の棟が分かれているから、文系だと判断した。どうしてかって、目の前に立った男は、一度見たら忘れられない顔をしていたから。

ぴちぴちの水着が、逞しい体格を強調していた。筋肉質な二の腕から手首にかけて、血管が浮いているのが恐ろしい。極めつけは、立派な体格に劣らない精悍な顔。鼻梁は高く、口は大きい。骨格が太いのか、全体的に威圧感がある男だった。

ワイルド系イケメンの登場に、尻がもぞもぞ落ち着かなくなった。

『……なにか？』

『なんの本、読んでいるんだ』

こういつ時って、ふつー、すいませんとか前置きが入らない？いきなり質問してきたごついイケメンは、そうするのが当たり前——上から訊ねる口ぶりだった。

『夏目漱石の虞美人草……』

『は？なにそれ？俺、本読まないんだよ』

なんで聞いてきた？ドン引きしていると、イケメンはじっと見下ろしていた。目力が凄いから、体が動かなくなる。

『……あの、なにか？』

『いや』

短い返事。イケメンはくるっと背を向けると、行ってしまった、ギリシャ彫刻みたいな肉体は、背中の筋が浮き上がっていた。本当に、美術館とかに飾っ

である、彫刻みたいな男だった。

……春休み開け。

大学三年の時期にぼっちで授業を受けて、ぼっちで昼食を食べる。そんな日々慣れてきた頃、同じ授業を受ける、顔は分かるぐらいの同期に話しかけられた。

『呼んでる人、いるよ』

友達ができるかもと、わくわくしていた俺は意気消沈。誰だよと、講義室の出口付近に近づいた。

『あ……』

『古柳、朔か？』

春休み、土手で話しかけてきたイケメンだった。前は水着を着て、筋肉が強調されていたけど、今日はジーンズに寒色のニットと、どこにでもいる大学生の恰好だった。

『そう、ですけど』

『この前、論文入賞してたよな？』

大学二年時、賞金目当てで応募した懸賞論文名を出されて、頷いた。結果は入賞だった。

『俺、今度、会社立ち上げるんだけど、システム開発、手伝ってくれないか？』

『はあ……？』

突然だとビビったけど、春休みに話しかけてきたのはこれかと、納得した。

したけど、声をかけてきた当の本人は、春休みの出来事など、忘れてる口ぶりだった。

公園でちょっと会った人間の顔とか、覚えているわけないか。

俺は二つ返事で了承した。

うちの大学は方針なのか知らないけど、学生のチャレンジ精神を後押ししている。特に学部とかサークルによっては、起業したくって軽いノリで話してい

るのを聞く。

だけど成功して、続くのはほんの一握り。イベント企画とか、イベントコンサル(何をするのか知らない)とかが中心で、芸能界、出版業界と適当なコネを作ったら、規模は縮小すると聞く。

こいつも見るから陽キャだから、イベント関係の仕事でしょと予想した。となると、俺にホームページの作成とかを、タダでやらせようとしているのかもしれない。

PHPはかじった程度。どこでバックレようかと算段していたが、起業自体がぼしやるかもしれないと、気楽に構えた。

『あ〜……俺で良かったら。あんまり技術はないから、他にいい人いたら変え  
て』

『いや、お前に決めた』

イケメンはきっぱりした口調だった。がっしりした顎に、体に響くような低

音と目力が怖くて、咄嗟に下を向いた。そしたら、名刺を渡された。

大東 将

連絡先を交換し、そこから打ち合わせだと呼び出されて……大東が、俺の偏見丸出しの予想を壊すような、分厚い資料を渡してきた。

会社のまだ企画段階だと渡された資料には、今後の人口推移とか、アジア市場とか、ごちゃごちゃ書いてあった。

取りあえず大東の会社は、アジア圏を中心に事業を展開していきたいのは分かった。アジア圏の情報を基にした、でかいマーケティング。データベースを作るのが、俺の仕事らしかった。

規模でかすぎ。イベントのホームページとか作ればいいと構えていた俺は、背筋を正した。他の技術者は？予算は？工数は？

慌てて質問し始めた俺を、大東はじっと見下ろしていた。身長が十センチ差はある——楠部も高いけど、大東は体格がいいから、それだけで緊張が走った。

『やっとやる気を出したな』

『何言ってる』

『最初、適当に返事をしていたから……俺は就活で面接官にアピールするために、起業するんじゃない。本気だ』

『……』

『だからお前も本気になれ』

大東に喝を入れられ、最高技術責任者（CTO）と大仰な役職を与えられた。完全に、舐めていた。大東の言う通り、インターン先で、アピール材料程度に、ぶら下げて行く起業だと、高をくくっていた。

『放り出すなよ』

念押しされて、諦めた。やれるところまで、やるつ。

大東に決心が伝わったのか、彼は他の技術者を紹介してくれた。今、思い出

すと、あの時が一番、楽しかったかもしれない。

どこで知り合ったのか、国籍、年齢、性別、専門……みんなバラバラの技術者を大束は集めて、俺に指示しろと言ってきた。年齢も上だったり、俺より能力がある人を相手にするのは、気疲れしたし、頭を悩ませることが多かった。

だけど大束や他の幹部達と仕様を決め、設計書を起こして、仲間たちと何度もレビューして、ブラッシュアップを行った。

楽しかった。みんなが違う視点でレビュー、意見、議論をするのは、昔の楠部と——まだ友達だった頃の楠部と、一冊の本を題材に語り合うのと同じくらい、夢中になるものだった。

リリースして、障害が起きて、修正して、またレビューして……ローンチされた。大束の会社は、滑り出しは上々だった。小さいながらも、今、注目するべきベンチャー企業として、経済誌に小さく載った。

会社が軌道に乗り、システムも問題なく稼働した頃だった。遅くなったがと、

大東が幹部を含めて、全員にメールを出した。ホテルの会場を貸し切って、社員総出の打ち上げが決まった。

トップの大東、他幹部が挨拶し、一応、俺も挨拶を済ませた。安物のスーツしか持っていなかった俺は、喜ぶ楠部がオーダーしたスーツを着ていた。壇上から戻ると、同僚たちから、高級スーツに着られていたと、揶揄われた。

でも会社は居心地が良かった。だって彼らは、キャンパスで広まった俺の噂を知らない。遠巻きに笑いながら指を差さないで、自然に接してくれる。

ぼっちになったのは、自己責任だと納得しても、惨めな気持ちは拭えなかったのに。大学から一步外に出れば、世界は広い。

大学に居場所が無くなった俺は、新しい居場所を見つけた、そんな気持ちだった……数十分後、ぶっ壊れたんだけど。

挨拶も終わり、打ち上げが中盤に差し掛かった時だった、後ろから肩を掴まれた。大東が深刻な顔をしていた。

『お前、ギャンブルにハマってるって聞いたぞ。かなり借金あるんだってな?』

隣には、日本語が堪能な香港出身の同僚がいた。今日の打ち上げのために髪をアップした彼女が、目を見開いた。

酒の席で話すことかよ……羞恥心と怒りを抑えて『そうだけど』と返した。

『どうして?報酬が足りないのか?』

『違うよ……俺が悪いんだよ』

ギャンブルがやめられない。気が付けば、オンラインカジノにログインして、スロットを回している自分。会社から貰う莫大な報酬も、数時間後には、手元に残っていないかった。

『どうして?お前、仕事ぶりは何も問題ないだろ?どうしてギャンブルなんかやってんだ……おいつ、聞いているのか?!』

大束がぐいぐい肩を引っ張ってきた。微かに匂うのは、酒の匂い。大束は相  
当、酔っているようだった。

『……別にいいだろ……お前に関係ない』

『ある。幹部に不穏な噂があったら、困るんだ。真面目になれよ』

酒はほとんど飲んでいなかった。素面で足元が、ぐらついた。

——真面目とはね、君、真剣勝負の意味だよ——口が巧者に働いたり、手が小器用に働いたりするのは、いくら働いたって真面目じゃない。——実を云うと僕の妹も昨日真面目になった。甲野も昨日真面目になった。僕は昨日も、今日も真面目だ。君もこの際一度真面目になれ。——

『宗近……』

『何言ってるんだ！俺の話、聞いてるのか?!』

がくがくと肩を揺すられた。でかい声でギャンブルをやめろ、お前のために言っているんだと怒鳴られた。

宗近……俺の嫌いな、宗近

本なんか読まない大束が、宗近と同じセリフを口にしたことに、衝撃を受け

た。

顔を背けると、息が苦しくなった。大束に胸倉を掴まれていた。

『おいつ！聞いているのか？真面目に——』

『CEO！やりすぎです！』

同僚が止めに入り、血相を変えて、幹部達が駆け寄って来た。ほろ酔い気分の打ち上げは騒然として……後日、俺は仕事を辞めた。

鬼のような形相で、大束に詰められたが、首を振った。借金がばれた。会社もきつと、大学みたいになる。

また楠部のマンションに引きこもった。俺を好きだと言いつける男のベッドに戻って、足を絡ませて眠った。

タクシーがマンションに着いた頃には、既に十二時を回っていた。ドアを開けると、パタパタと足音がして、ジーンズ姿の楠部が駆け寄って来た。

「お疲れ様。お茶漬けとか作ろうか？」

にこにこしながら、俺のバッグを受け取り、抱きしめようとする。そーっと交わして、リビングに入った。

「遅かったね。タクシーで帰ってきたの？連絡してくれたら、迎え呼んだのに」

「ああ、うん」

コートをかけて、洗面台に向かった。手洗いを済ませて戻ると、楠部がキツチンに立っていた。

「あのさ、話あんだけど」

「うん？なに？」

「駅で篠田に会ったよ……覚えてる？」

察したのか「そう」と言葉短く、楠部は黙り込んだ。

……『お前、腹減ってね？そこで、飲みながら話そーぜ』

チエーン店の居酒屋に入ると、既に酔っぱらっていた篠田は、ビールを注文していた。俺は目に付いたグレープフルーツサワーを注文し、店員がジョッキを二つ、運んできた。

『じゃー、まあ、お疲れ』

『……なんで楠部の話？』

胸騒ぎがして、ジョッキの取手を握りしめていた。篠田はビールをぐっと呷ると、陽気な感じで笑いだした。

『大学の時さあ、俺、お前にオンラインカジノ教えてくれて、頼まれたんだ

『お』

『そう、楠部に？』

『うん。今考えたら、意味分かんねーだろ』

学生の時、楠部に話しかけられた。オンラインカジノやるんだって？と。篠

田はその他にも、仲間内で賭け麻雀とか、競馬など、一通りのギャンブルを楽しんでいた。

キャンパスで有名になっていた楠部も、賭け事に興味があるのかと、頷いた。オンラインカジノをやりたいならと、あれこれ教えた。話しているうちに、楠部に頼まれた。

『古柳に勧めてくれないか？』と。

何で？と聞くと、古柳は真面目過ぎるから、気休めになるものを教えてあげたい。自分は忙しいから、声をかけてくれないかと、お願いされた。

自分はずまらないから、ちょっとした息抜きができる娯楽も勧められない――友達として、心配してるんだ。古柳って、真面目過ぎるところあるだろう？

篠田は確かに、と頷いた。俺は学生時代、講義室の一番前に座り、質問やレ

ポートに力を入れていた。それは親に殴られながらやる勉強じゃなくて、自分が好きな勉強ができるから。単純に、大学の授業が楽しかったただけなんだけど、周囲は『がり勉』とか『教授に媚びを売ってる』とか陰口を叩いていたらしい。

——俺に頼まれたって、秘密にしといてくれる？友達に気を遣わせたって、

古柳は気を病むから——学食を奢られて、篠田は了承した。

空腹と疲れは吹っ飛び、代わりに喉が渴いていた。

『いやー、マジでほんと、悪かったよ。この前の同窓会だって、お前、来てなかったじゃん？心配してたんだよ』

連絡を取り合う大学の同期など、楠部と大束以外いなかったの、同窓会など知らなかった。黙ってジョッキに口をつけた。

『でもお前さあ、予想外にハマってたからびびったわ。で俺さあ、あり得ないよなって、ゼミメンバーに話したら、尾ひれ付きまくりで、あ、俺は本当にお前のこと、心配してたんだよ。でもほらあ、他人は無責任じゃん？みんな好

き勝手なこと言っ……』

ぐいぐいビールを飲んでいる、篠田の声が遠くなった。サラ金に手を出しているとか、臓器売ったとか、根も葉もない噂の出どころは篠田だったのか。

『でさあ、お前、大丈夫なの？』

『……借金？』

『いやいや、楠部だよ。あいつ、あいつほらあ……お前なこと気に入ってたんだろうな。楠部ってあれらしいじゃん？』

『……あれって？』

胸のざわつきは体全体に行き渡った。ちょっとしか酒を飲んでいないのに、吐き気がしていた。

『ほらあ、今流行りの横文字……LGBT？』

何が面白いのか、旧友は吹き出した。上手く反応できず、一人で笑い転げる友人を見つめていた。

『週刊誌の記事がネットに出てて、男と同棲中とか書かれてたよ。ゆーめー人は大変だよなあ』

『……そっか』

『お前、あいつになんかされてないよな？大丈夫だよな？』

頼んだサワーをほとんど残して、マンションに帰った。

「……全部、分かったの？」

聰一郎は白けた顔をしていた。かちやかちやとキッチンから食器を取り出す音が、リビングに響いた。

「おい……なんか言えよ……言ってくれよ……」

「ギャンブル依存症の調査でね、幼少期、過度に抑圧を受けてきた人は、その傾向が高いって知ってたんだ」

拳を作っていた手が、震えた。楠部にだけ話した、俺の恥部。頭に血が昇る

ような錯覚がして、体が熱くなっていた。

「でも君があそこまでギャンブルにのめりこむのは、予想外だったけどね」

「お前が……っお前が、ギャンブルなんて、あんなの勧めなかったらっ」

「そうかな？君がギャンブルで借金を作ったのは、自己責任だよ」

真つ当な指摘に言葉が詰まった。だけど分からなかった。楠部がなぜそこま  
で、自分を追い詰めるようなことをしたのか。

ギャンブルがやめられず、楠部から預かった金を使い込んで、彼に頭を下げ  
た日。友人の情けない姿を見て、内心、ほくそ笑んでいたのか。

「——でも、君がギャンブルにハマらなかったら、また違う手段を考えていた  
けど」

「……俺が惨めになるのを見たかったのかよ？」

「違うよ。こうでもしなかったら、君は俺の告白なんか受けないよね」

がんと頭を殴られた気がした。好き？と聞かれるたびに「うん」と返事をした。そうしなければ……あの時、ホテルに行くのを断ったら、金を返して貰えなくなると。それだけが、頭を占めていた。

楠部は、俺の内心など、全てお見通しだった。彼がそうなるように、仕向けていた。

「好きですって告白して、手をつないで、デートして、セックスして……世間一般の恋人同士がやることをしたかった、君とね。けど君は絶対に断るよね？

あり得ないって、友達としていようとか言って」

「それは……」

楠部の言う通りだった。恋愛からほど遠い勉強漬けの日々を送って、まともな女の子に話しかけられない自分。それでも付き合いたいと思うのが、女の子。

同性とか、考えたこともなかった。

楠部はキッチンから出てくると、肩が触れ合うぐらいの距離で、向かい合っ

た。

「嫌だった」

淡々とした声だった。

「君がね、読書会にくる女の子の太もとか胸を見てる時に、俺も見てたよ。

君に触れたって……俺のこと変じゃないって、受け入れてくれたのは君だけだから」

楠部の手が、肩に回った。びくりと体が震えて——半歩、後ろに下がった。

「君が欲しかった。欲しくて欲しくて、誰にも奪(と)られたくなかった」

「何言ってるんだよ……」

「友達でいようとか言われるぐらいなら、なんでもするって決めたんだ……朔はもう、俺なしじゃ、いられないだろう」

「……嫌だ」

「朔」

「やめる……別れる。別れたい」

「……そんなに職場の女の子と付き合いたいの？」

反論する前に、体を突かれる。頭をソファにぶつけた感覚と——押し倒されていた。はっと下腹部を見たら、楠部がベルトを外していた。

「やろこみ」

「嫌だっ！別れる！お前と別れるっ！」

別れる。楠部と別れて、一から全部、やり直す。全部、壊れた。俺がクズになって、全部が歪んで、めちゃくちゃになったのは、こいつと出会ったから。

読書会で楠部に出会わなければ、俺は。

「じゃあ、今すぐお金返して」

顎を掴んだ、楠部の手は冷たかった。キスをされそうになって、顔を背ける。

見ると今にも泣き出してしまいそうな、男の顔があった。

どろどろ

どうしてお前が、泣くんだ。

「朔はね、ギャンブルもソシヤゲもやめられないよ」

「やめるー……っあ」

怯んだ隙に、聰一郎がストラックスを下げた。下着越しに一物を握られて、声が出た。

「やめる、やめるからっ」

「やめられるの？好きなだけギャンブルに金使って、ソシヤゲに課金して、全部できなくなるんだよ？」

「やめられるっお前とは別れるんだ!!」

下着越しにぎゅっと亀頭を握り込まれて、腰が揺れた。俺の情けない反応に、

楠部の口角が上がった。

「ちんこ突っ込まれて、散々よがってきたのに？ねえ、朔、好きでしょ？お尻に挿れられるの……気持ちよくしてあげる」

ぶるりと飛び出たペニスが、生温かいものに包まれた。悲鳴のような声を上げると、冷たい指が、睪丸を揉み込んだ。

目を開けると、いつもの天井。重たいなって隣を見たら、楠部が俺を抱き込むようにして、寢息を立てていた。

絡み合った足をそっと外して、腕をどけた。楠部の寝顔は、腕の良い職人が作った、美しい人形みたいだった。すうすうと寢息を聞いて、散らばったスラックスやシャツを拾う。音を立てずに、寢室を出た。

あちこち痛む体を擦って、くしゃくしゃになった服を纏う。テーブルに放り出されたスマホと財布を持って、コートを羽織った。音を立てないように、そおっとマンションを出た。息が白くなる外で、スマホの電源を入れる。日

付は三時を回っていた。

指先がかじかむ夜道を歩きながら、検索エンジンに打ち込んだ。

ネカフエ 麻布十番

ヒットしたページを押す前に——ああ、そうだと、大東にメッセージを送った。

3:15 お前の言ったこと、間違ってたよ

吐き出すような気持ちで、返信は期待していなかった。けれどすぐに既読が

付いた——スマホが振動して、画面には「大東」の二文字。

「どうした」

「あ、や、ごめん。こんな時間に」

「いい、それよりお前……何かあった？」

大東の鋭さに驚いたが、彼に楠部との関係なんかバカ正直に話したら、殴っ

てくるかもしれない。なんでもないと、言葉を濁していたら「そこにいろ」と言われた。

「え」

「おんんん」

電話が切れた。

### 真面目になれ

そこにいろって——俺は一人、住宅街の夜道に突っ立っていた。午前三時。車もほとんど通らない道路で、上を見上げた。

街灯は点いているけど、マンションには明かりがなく、静寂に包まれていた。

こんな時間帯に、迎えに来てとは言えなかったし、場所も伝える前に切れた。

メッセージを打ったが、既読は付かない。

大東、慌ててたのかな。

だったら尚更、申し訳ない。あっちが気付いて、電話してくるかな。それとも俺から……動くなと言われたから、ぐるぐる円形を描くようにうろついていたら、車の音が聞こえてきた。

何気なく顔を上げたら、ライトを当てられた。ゆっくりと速度を落として近づいてきた国産車に、声を上げた。

「え？」

「お前、何だよ！その恰好！」

ぼんやりした頭に、もの凄い怒鳴り声。窓を開けて大声を上げるのは、大東だった。近所迷惑だと周りを窺っていたら、車が停まり、ドアが開いた。

「馬鹿っ、乗れ！」

体を押し込むように、後部座席に追いやられた。見慣れた座席のシートに、だんだん頭が冴えていく。学生時代から、何度か送り迎えしてもらっていた車

だった。

ふつー金持ちって、外車を乗り回すイメージ（楠部はペーパードライバーだから、車は持たない）だったから、大束の趣味はちょっと意外だった記憶がある。

燃費の悪い車とか、コスパが悪い、だったか。押し込められて、車のシートに膝を付いた。何か言う前に、大束が運転席に戻り、アクセルを踏んだ。

「あの」

「お前、その恰好はなんだ！」

また怒鳴られた。バックミラーに映った目つきが鋭くて、体が縮み上がった。

寒いし、怖いしで、何も言えなくなっていると「まさか」と言われた。

「お前……もしかして……強盗にあったのか？」

「いや、違うから」

怒鳴り声が一転、気遣うような声音に変化した。

「本当に？」「警察は？」「何も恥ずべきことじゃない」とか、斜め上の声をかけられて「大丈夫」と繰り返した。

確かに、体はあちこち痛んだ。最低限の持ち物で出てきた身なりは、ベルトのないスラックス、くしゃくしゃになったシャツの上からコートと……大束が勘違いしてもしようがなかった。

「取りあえず、俺のマンションに行くぞ」

「うん」

「心配させないでくれ」

「……あのさ、なんで場所、分かった？」

俺、住所とか番地、教えてないはず……しかも楠部と同居しているマンションから結構、歩いていた。

運転席に座った男は、さっきまで喋りっぱなしだったのに。車内はラジオも無く、しんと静まり返っていた。

「大束？」

「……言っただろ？」

「え」

「電話で、お前が言ったじゃないか。ここだって」

「教えたっけ……？」

首を捻ったが、大束のきっぱりした口調に、否定できなくなった。バックミ

ラー越しに、ぎらぎらした目が合う。

なんかビームとか光線が出そうな目力に「そうだったかな」と頷いた。

電話の時、言ったのかな。つい数十分前のことなのに、記憶が無い。頭の中、ぐちゃぐちゃしてるから、忘れたのかも。

「……もじすく着くかじ」

「ん」

スマホを見ていたら、ふと楠部は寝ているのかと、彼の寝顔が、脳裏に浮かんだ。

大東の住まいは、楠部のマンションからそんなに遠くない、恵比寿のマンションだった。夜中だったからあんまり見えなかったけど、お洒落なデザイナーズマンションだった。高そう。

確か、楠部が買ったあの部屋は、一カ月の家賃が俺の給料四カ月分だった。こっちはいくらするんだろうとか、現実逃避しながら、エントランスを抜けた。低層マンションらしく、最上階は二階。

案内された部屋は、まず殺風景なリビングに驚いた。観葉植物一つ置いてない、広々とした空間は、テレビ、ソファ、ローテーブルにキャビネットと、最低限の家具が置かれていた。

展示会とかの方がまだ、花とか置いてそう。かろうじて、ローテーブルにタブレットPCが置かれていた。

「――で、何があったんだ」

ソファを勧められ、座っていると、大東がワインボトル二本とグラスを二つ、持ってきた。

「古柳は……スパークリングワインでいいか？ほとんど飲まないだろう」

聞かれたことは無かったのに、大東は普段の食事を見ているらしかった。シユワシユワした飴色の液体が注がれた。

次々と弾けていく小さな気泡。じっと見ていたら、やっと話す決心がついた。

「……楠部と住んでるマンション、出て来た」

学生時代にオンラインカジノにハマったこと。膨らんだ借金を返せず、楠部に肩代わりして貰ったこと……楠部と交わした制約と、職場に気になる子がいること。……

楠部と体の関係があることは除き、マンションを出てきた経緯を話した。

大東は黙って聞いていたが、でかくて生活感の無さそうなローテーブルで、

頭を抱えた。

「古柳……」

呆れてものが言えないのだろう。俺の噂を聞いて、胸倉を掴んできた男だ。

誓約書にサインして、楠部の金を浪費していたと分かった今……殴られるな。

でも殴られて当然のことをしてきたのは、自分。

楠部が全て仕組んでいたとしても、転落していったのは自分。

いくらでも金を貸すと甘言につられて、ここまで流されたのは自分。

大東は、宗近みたいな口癖があつて苦手だけど、正しい奴だった。ここで突き放されてもしょうがない。彼が口を開くのを待った。

「お前、楠部と寝てるだろ」

「は……な、なんで」

「首。あとボタン、掛け違えてる」

マンションを追い出されるか、どんな説教が飛んでくるのか——身構えていたら、震えあがるような指摘。慌ててボタンを留める。大東はでかい溜息をつくと、後頭部を搔いた。

「古柳、俺は今、お前と売春の是非を議論するつもりはない」

「……うん」

「借金を盾に拒めなかったんだろ？」

「……」

あの時、断れば借金を返して貰えなくなると、恐怖の方が大きかったのは事実。でもいざラブホテルでやった後、これで借金が無くなったと安堵した。この体一つで、三百万がチャラになって、ラッキーだって。

「……いくらだ？」

「……なにが」

「借金だ。学生時代の」

大東は自分のグラスに赤ワインを注いでいた。乱暴な手つきに、ワインが零れそうで、ヒヤヒヤした。

「……三百万」

「三百万で売ったのか……体を」

「……うん」

もう嘘は許されないし、取り繕ったら、逆にややこしくなる雰囲気だった。

大東の見開いた双眸が怖くて、下を向いていた。

突き刺さるような視線を感じて、顔を上げられなかった。過去、大東とシモの話とか、したことがなかった。俺も下ネタが苦手ということもあったが、何よりも彼の纏う潔癖な空気が、猥談を許さなかった。

「三百万……」

凍えるような声で、何度も「三百万」と単語を口にされた。

「あの、軽蔑されて、当たり前だから……ごめん」

どうして大束に謝っているのか。でも謝らないと、駄目な空気。グラスの細い取手を掴まんだ大束の手が、震えていた。投げられそう……

「そんな端 はしたがね 金で……体を売ったんだな……」

怒りを抑えているのか、声まで震えていた。大束みたいな実家がデカい工場  
で、本人も成功しているんだったら、三百万は些細な金額だろう。

だけど俺にとっては、人生が崩壊するような、途方もない金額だった。

「お前は借金のカタに、楠部に体を売っていた。あまりにも倫理観のない行為  
だ」

「……はい」

「だから俺が代わりに金を返す」

耳を疑った。顔を上げると、大束が赤ワインを一気に飲み干していた。かんと、テーブルに無機質な音が響いた。

「何言ってる——」

「ここで生まれ変わるべきじゃないのか？真面目になれよ」

別れ際、お決まりのように言われてきた言葉。大東は、本は読まないと言っていたのに。どうしてと、寒気がした。落ち着かなくなって、俺もグラスを傾けた。

酒臭くない、程よい甘さのワインが、喉を潤した。

「ここがやり直せるチャンスだ。お前も、ここで立ち直りたいから、俺に連絡したんだろ？」

観葉植物すらない、寒色を基調にした部屋。本なんか一冊も——本棚すら、見当たらない。宗近なんか知らないはずの男は、宗近そのものだった。

——君もこの際一度真面目になれ。——どうだね、小野さん、僕の云う事は分らないかね

——いえ、分ったです

——真面目だよ

——真面目に分ったです

「そう、かも……しれない」

大東が苦手だ。今も、その意識は消えていない。強靱な肉体に、自分の正しさを疑わない男。いつも自分自身が、どこか頼りなくて、後ろめたさを感じる俺とは、正反対な男。

楠部は俺を否定しなかった。だから友人としても心地よくて、ずるずると流されていた。

「俺が金を返す……やり直そう」

大東の目は輝いていた。俺みたいなクズを、更生させようって、決意した瞳。これがうつつとしくくて、怖くて嫌いだったはずなのに。

大東の言う通り、ここがやり直せるチャンスかもしれない。

「大東、金は俺が自分で、返したいっ」

やり直すチャンスだから。ここで楠部から自立するためにも、人に甘えては

いけない。急ぎ立てられるような気持ちで、大東に頭を下げた。

「大東、ありがとう。代わりに返すとか、気持ちは嬉しい。けどやっぱり自分で返さないと駄目だ」

楠部に指摘された通り、立ち直りたいと——日高愛美の笑顔が浮かんだ。可愛くて、仕事に一生懸命な後輩。好きだ。でも彼女と付き合いたいか——それはきつかけ。どこかで、このままじゃいけないと、何度も自分に言い聞かせてきた。

楠部から自立する。

「ここでもやり直すんだ。」

「真面目になるよ。真面目になって、自分で金返して、楠部に……真面目にな  
っ——っね」

視界がぐらついた。持っていたグラスを取り上げられる。

「すべて酔っ払いな……泊まっちゃけ」

ぐらぐらして、頭を押さえていると、腕を掴まれた。肩を組まれて、持ち上げられる形で、立ち上がる。

足元が揺れる感覚がふわふわして、気持ち良かった。頬に温かい吐息を感じて、横を向いた。

「ゲストルームでいいよな？」

「あ、ありがと……大束、俺、金はじ、自分、で、返したい」

「……将でいい。将って呼んで」

ぐらついた視界で、男の咽喉仏が上下した。やけに生々しい動作が目について、嫌な感じがせり上がる……ラブホテルに入った時の、楠部の余裕のない顔が浮かんだ。

違う。

すぐさま、大束に感じた嫌悪感を打ち消した。

自分の正しさを、自分の行いこそが、正義だと信じている大学の同期。昔か

ら性欲など存在しないように、潔癖な空気を纏った男だった。

彼のストイックさが、金にだらしない俺を炙り出すから。だから、嫌いだったんだ。

「悪いけど、ゲストルームの隣、俺の部屋に入らないでくれるか」

「……？あぁ、うん？」

「すげー汚いんだ。見られたら終わり」

リビング、こんな綺麗なのに。意外だな——照れた笑顔を最後に、そこから記憶がない。

#### 後輩

楠部のマンションを出てから、大東のマンションに寝泊りするようになった。大東が車で送ると何度も言ってきたが、そこまで甘えるのは流石におかしいだろう。電車で通うと何度も押し問答して、最寄り駅が恵比寿駅になった。

通勤もそうだけど、泊まった初日、ネカフェに行こうとしたが、大東に引き留められた。

『金、返すんだろ？ここで無駄金使ってどうすんだ』

とは言われたが、完全に居候の身。本人には聞けなかったので、そつとスマフォで大東のマンションを調べた。

一カ月の家賃が、俺の給料数ヶ月分。しかも大東は入居時、マンションは購入したと言う。楠部と同じ、金に不自由しない身分の同期。じゃあ俺はと、己を振り返り、実家すら頼れないことに気がついて、愕然とした。

大東は「やめろ」「ここにいればいいだろ」「遠慮することはない」……くどくど言われた結果、ゲストルームが俺の仮住まいとなった。

大東と同じ屋根の下、暮らすようになってから、彼の意外な一面を見るようになった。

生活感の欠片もない部屋だと感じた空間。自炊とか絶対してないんだろうな

と朝起きたら、朝食が用意されていた。

大東はチエック柄のエプロンをして、慣れた手つきで目玉焼きを作っていたから驚いた。聞けば普段、調味料や料理道具は棚に仕舞っているらしい。整理整頓され過ぎて、生活が見えなかったただけだった。

『自信ないけど』

ぎこちない笑みを浮かべて、盛り付けられた皿を出された。目玉焼きにサラダ、ミニトマト、ウィンナー。食パンはキツネ色に焼かれて、紅茶のティーカップが並べられていた。

一口食べて、美味しい。

独り言のように呟いただけだったが、大東は顔を綻ばせていた。彼の自然な笑顔とかも見たことが無かったので、これも意外だった。

楠部と同居するマンションでは、ほとんど彼が、料理を作っていた。俺がキッチンに立つのは、カップラーメンに、お湯を注ぐ時ぐらい。楠部の手料理も

そうだけど、大東の料理、俺には絶対にできなかった。

お金持ちで、イケメンで、料理上手。

大東は口うるさくて、親切が時々、度が過ぎていると感じる時もあるけど、世間から見れば、非の打ち所がない男だろう。

エプロンを脱いで、自然と向かい合うように食事をする大東は、いつものように『部屋には入らないでくれ』と念押しした。

『入らないよ』

初日から言われたのが、部屋のどこを使ってもいい。ただし、私室には決して入らないで、だった。

自分の部屋を何度も『汚い』と言う男に、その度に『入らないよ』と返事をした。

こっちは居候させてもらっている身。最低限、大東もプライベートは線引きしておきたいんだろう。

『本当に汚いんだ。ここは人が来るから、綺麗にしているけど。古柳が見たら、絶句する』

『そんなにかよ』

『ああ、もうすぐ掃除するから』

朝食をしっかりと取って、エレベーターに乗る。エントランスまで付いて来る大東に、手を振って、いってらっしゃいと見送られる毎日。

スマホに毎日残る着信履歴を無視して、電車に乗った。

「定時後、そんなに時間取らないから、話があるんだ……いいかな？」

昼休み、俺はランチから帰って来た日高愛美に、声をかけた。たつぷりとグ

口スを塗った口角が上がった。

「今日は予定が入ってて、でも用事はすぐ終わるんで！その後でも良いですか？」

艶々した黒髪に、大きな瞳。今日、着ているベージュ色のニットのワンピースが、日高愛美に良く似合っていた。仕事で声をかけるのも躊躇うぐらい、綺麗だった。

「うん、ありがとう」

愛想の良い笑顔に、胸をなで下ろした。声をかけるフレーズを、昨晚から、大束のマンションで何度も復唱した。

日高愛美に、気持ち告白したい。

楠部への、借金の清算を考えるうちに、気持ちが高まっていた。まず断られるだろう。けど、それで良かった。彼女が、俺にきっかけを与えてくれた。彼女への好意が、楠部からの自立を決意させてくれたんだ。

やり直すんだ、自分は。

ずるずると流されるまま、ここまで来た。でも、それも終わり。借金を返しながら、地に足を付けた生活がしたい。

「え、お話ってなんですか？……知りたいな」

首を傾げると、さらりと黒髪が揺れて、ドキドキした。

「……その時ね」

「じゃ、楽しみにしてます！」

明るい笑顔に、こっちまで笑みがこぼれた。

……定時を三十分過ぎたところで、日高からメッセージがきた。

18:36 用事終わりました。今エントランスにいるんで、上がってきます！

18:36 いいよ、俺がそっち行くから

まだオフィスには半分ほど、人が残っていた。同僚がキーボードを叩くなか、告白なんかできない。

エレベーターに飛び乗ると、階のボタンを押す指が震えていた。エントランスなら近くのカフェに……誰がいるか分からない。少し歩くけど、外のカフェ

で……どこで告白しようか、心臓がばくばくとうるさかった。

今日に限って、エレベーターは途中で止まらなかった。開いて、エントラン  
スに足を踏み入れた——日高の姿を探す前に、体が硬直した。

スタイルの良い長身。見慣れたイタリアンスーツに、これまた見慣れた黒い  
コートを着た男。

「……聡一郎？」

「あ、古柳さん！お疲れ様です！」

聡一郎の近くにいた日高が、声をかけた。にこにこしながら「すみません。  
来てもらって」と頭を下げる。

可愛くて、明るくて、礼儀正しい後輩。

どうして彼女が、聡一郎と一緒にいる。

「朔、お疲れ様」

一週間前に、マンションを飛び出して以来だった。普段通りの上品そうな笑顔を作り、俺の肩にコートをかけた。

「寒いよ、ムム」

「あ、の」

「もう、イチャつかないで下さいよぉ〜」

日高の言葉に、体に震えが走った。

どういふことだ。彼女の気安い口調に、ぐるぐると脳内で、はてなマークが旋回した。

「あはは。日高さん、いつもありがとう」

「いいですよー楠部さんのお役に立てたんですから」

「約束は守るからね」

親し気に、俺よりも——聡一郎と日高の会話は、以前から知り合いのような、

気安い態度だった。

「約束」「条件」「ありがとうございます」「助かった」……俺そっちのけで交わされる会話に、足元が崩れていくようだった。

「……な、なん、で？」

信じられない気持ちで、告白するはずだった後輩を見た。可愛らしく首を傾けた彼女は、グロスを塗った唇を開いた。

「楠部さんとお約束したんです」

ここに客先常駐が決まり、出勤するようになった頃、楠部に声をかけられた。恋人が働いている。

彼が心配だから、どんな様子が定期的に報告して欲しい。

代わりにお礼はする……ピンク色の唇から出てくる言葉を、どこか遠く感じた。

「それで、希望する会社に転職させて頂けることになったんです！本当にありがとうございます、楠部さん！」

「新しい場所で、頑張ってるね」

「はー！」

日高が愛想よく接していたのは、楠部に俺の様子を報告するため。態度に勘違いした俺は……

「プ、プロ彼女っ、て……前」

「えく、恥ずかしい！覚えてたんですかあ！あれ、冗談ですよ。プロ彼女とか古いじゃないですか、もうそんな時代じゃないです！だから私、ちょっとでも上を目指したいんです！」

大きな丸い瞳を輝かせた後輩を、ぼんやりと見つめた。転職の口利きを条件に、情報を渡していた彼女。

礼儀正しくて、仕事に一生懸命で、でもちよっと気分屋なところがあって、

俺を尊敬してるって……ああ、全部、演技だったのか。

「古柳さん、いつも優しくくて、私にもいろいろ教えて下さって……控えめです

よね、恋人はいないって、私に仰ったんですよ」

「朔は恥ずかしがり屋さんなんだ」

「えー、なんですか、それ！彼氏のことならなんでも分かってるみたいなの！」

きゃーきゃーはしゃぐ日高愛美が、目を見開いた。

「古柳さん！そう言えば、お話って何ですか？」

「……え、っと」

「古柳さん、以前、残業に付き合って頂いて……今日、サプライズみたいになりましたね！」

ピンク色の唇から出てくる言葉に、頭がクラクラした。思わぬところで、恋人同士を鉢合わせさせたと喜ぶ彼女に、閉口した。

恐ろしくなって、楠部を見ると、彼は上品な笑みを取り払い、無表情になっていた。

日高愛美の報告から、俺が好意から、彼女に良くしていることを——全部、お見通しだった。学生時代から、俺はずっと楠部の手のひらで、転がされている。

「日高さん、ありがとう……朔と話がしたいんだ」

「あ、はい！邪魔者は消えまーす！」

無邪気な笑顔で、日高愛美がエレベーターに飛び乗った。扉が閉まる直前、嬉しそうに手を振られた。

待って、話がある、俺は君のこと

静かにエレベーターが上昇した頃、肩に触れられた。寒さと恐怖で、呼吸が荒くなっていた。

「朔、大東のマンションにいるよね？」



回して、ベッドでセックスして、また金を使って……

「朔、お願い、そばに居て」

拘束するような抱きしめ方に、もがいた。楠部は懇願するように「戻ってきて、お願い」と耳元で囁いた。

「真面目になる、お、お前に金返して、真面目になるんだよっ」

「お金なんか返さなくていい。ねえ、帰ろう。一緒にいて……お金は朔が好き  
なだけ、使っただけから」

耐え切れなくて、楠部を突き飛ばした。

それじゃあ、同じことなんだ。

このまま、同じ場所をぐるぐると周回し続けるのか。

ずっと楠部とあのマンションで、あの日常に戻るのか。

嫌だ、戻りたい、やり直したい、楠部と本の貸し借りをして、時間を忘れる

まで語り合った日に、戻りたい。

「駄目なんだよ、それじゃあ……駄目だよ……」

俺は楠部が、友達として好きだった。イケメンで、頭が良くて、本の趣味は全然合わなかったけど、一緒にいて、居心地の良い相手だった。

もう一度、あの頃に戻れたら

同じ立場に立って、楠部と向き合いたかった。

「やり直したい……お前と、友達だった頃に、あの頃に戻りたいんだよっ！金、

返さなきゃ、戻れないんだ！」

驚いたように名前を呼ばれる。腕を伸ばされて、玄関に向かって、走り出していた。

堕ちる

どうやって帰って来たのか、記憶があやふやだった。

楠部を突き飛ばすように走って、走って……大東のマンション。俺はリビングのローテーブルに突っ伏していた。

「大東……俺……真面目になる」

「……今日はもう飲め」

「真面目になる。やり直す。やり直したい」

借金を返して、楠部から自立したい。原因を作ったのはあいつだ。でも、ここまで落ちたのは、俺が弱かったからだ。

「そろそろさっさと……」

名前を口に出すと、目の前がぼやけていく。頬に暖かいものが伝って、自分が泣いていることに気が付いた。

顔を上げると、ソファに放り投げていた黒いコートがあった。楠部のコート。手を伸ばして、引き寄せていた。

「古柳？」

「なんで……なんで」

楠部のコートに、頬擦りをした。懐かしい匂いがする。嗅ぐと落ち着いて、安心できる匂い。この匂いに包まれて、ベッドで眠るあの瞬間、確かに幸せだった。

優しく、お金を貸してくれて、セックスする以外は、友人だった時のようにかけて、食事をして……

「やり直したい……あいつと、友達に戻っ、てっやり直したい」

友人だった時の、あの頃に戻りたかった。そのためには、金を返さなくてはいけない。

楠部の手のひらで転がされるように、そこに甘えてきたのは自分だ。

全てを清算して、あいつと向き合いたい。

「お前はやり直せるんだよ……頑張ろっな」

スパークリングワインが空になったところで、大東がグラスを持ってきた。オレンジ色の液体から、オレンジジュースのようだった。

「うん……大東、あり」

「将な、た・す・く」

「あ、たすく……うん」

大東は爽やかな笑顔で、俺からコートを奪うように取り上げた。寂しくなった手に、グラスを渡される。すっきりとしたオレンジの匂いがした。

「お前、すぐ酔っから、もうジュースで良いか？」

「ありがとう……」

ぐらぐらする頭で、グラスを傾けた。オレンジジュースの甘酸っぱい味が、咽喉を潤していく。

「会社には代わりにメール出しといたから。まあ、就業時間外だったから、相手も気にしなかったぞ」

「ん……」

美味しくて、一気に飲み干すと、大束が笑い声を上げた。

「?……あ、なに?」

「口の端から零れてるぞ、ったく、どんだけ酔ってたんだ」

唇の端を、太い親指で拭われた。擦り付けるような強い力に、違和感を覚えた。

「あ……?たすく、もうだい、しょぶ……?」

「駄目だよ。ほらあ、服にも零れてる……脱げ」

さっきより頭がぐらぐらする。視界まで揺れて、気が付いたらリビングの天井があった。立ち上がるうとして、大束に肩を押し付けられた。表情が見えない。

「た、しゅ、く?」

「ちゅ……」

起き上がろうにも、下半身が重たくて、視界がぼやけていた。酔い覚ましにジューズを飲んだはずなのに。

耳元に暖かい風を感じた。大束の……吐息……？

「朔、俺は——」

ぼやけた視界が、徐々にクリアになる。見慣れない天井……どこ？頭を動かした時だった。

ぎよっとした。

自分の顔があり、鏡かとまじまじ見つめると、違った。ピントがずれた、俺の写真。自分のまつ毛まで見える、至近距離で撮られた写真。記憶にはなかった。

「——は？」

写真は一枚だけではなかった。ベッド横の壁に、寝顔、教授との談笑、授業中の頼杖……ありとあらゆる俺の写真。全て、撮られた記憶が無かった。

「『君は学問も僕より出来る。頭も僕より好い。僕は君を尊敬している。尊敬しているから救いに来た』」

横を向くと、こちらに背中を向けて、デスクチェアに座る男。逞しい背中から、誰かなんて、考える必要も無かった。

くるりと、椅子が回転する。文庫本を片手に、男が立ち上がった。

「起きたか？」

「は……た、将？こ、こじ、どこ？」

「ん？俺の部屋」

淡々とした大束は、文庫本をベッドに放り投げた。思わず、表紙を見ると、夏目漱石『虞美人草』。混乱する頭で上体を起こし、ベッドから起き上がろうとした。

「？」

足首が引つかかる感覚に、掛布団を捲った。細い銀色の鎖が、足首を拘束していた。見慣れない道具が、徐々に頭を動かしていく。これは足枷……？

「は？なに、これ？は？」

意味が分からず、また信じたく無い気持ちで、顔を上げた——見下ろす大東の目に、覚えがあった。初めてホテルに入った時の、楠部の目。そっくりだった。

ぞつとして、部屋を見渡した。写真がべたべた貼られたデスクの横に本棚があった。

ハードカバーの夏目漱石全集が揃えられ、文庫本まであった。山本周五郎、坪内逍遙、芥川龍之介、白鳥正宗……名だたる文豪の名前が並んだ本棚に、息を呑む。

忘れもしない。俺が好きで、何度も繰り返し読んできた文学。読書会でプレ

ゼンして、楠部と交換してきた小説だった。

「な、なん、写真っ……本、読まないって」

俺の写真が、壁いっぱい貼られた異様な空間に、頭が混乱した。ベッドの上でもがいていると、大束がベッドに腰掛けた。

スプリングが揺れる音に、体がビクリと反応した。

「俺は、お前を理解しようとした」

太くて長い腕が伸ばされた。スローモーションみたいに、ゆっくりと指が、首を掴んだ。

ぐっと力を入れられ、呼吸をしようと口を開いた——視界が揺れる。天井ではなく、大束の顔が目の前にあった。

「た、たす、く……つぐ」

「可愛いなあって、ものにしようとしたら、もうあいつが犯<sup>や</sup>っちゃった」

「つく……つく」

大東の「あいつ」が誰を指すのか、下半身に体重をかけられて、ますます苦しくなった。

「俺のものにしようとしたのにな。だから、お前が読んできた本も全部読んだよ。楠部とは楽しそうに交換して、俺には一度も勧めてこなかったな」

「た、す、苦しっ」

「お前はあいつの上っ面に騙されて、借金漬けになって……本当に馬鹿だよ」

熱を帯びた瞳が、輝いていた。楠部も俺に乗っかる時、こんな目をする。大束は薄い唇を舐めていた。ああ、こんなところまで、楠部にそっくりだった。

「可愛いなあ」

暴力的な目とは裏腹に、甘ったるい声だった。

「俺は……ああ、そうだった。これ」

「な、なん、や、嫌っ」

すつと、首から圧力が無くなった。げえげえ息を吸っていると、大東の腕が伸びて……ベッドに備え付けられた引き出しから、茶封筒を取り出した。

「な、な」

「三百万って言っただろ？」

ベッドに放られた茶封筒の口から、万札の束がちらりと見えた。

「お前が、楠部に買われた額……前金だ、受け取れよ」

「何言ってるんだよっ」

信じられない気持ちで怒鳴ったら、顎を掴まれた。太くて、熱を持った指が、頬に食い込んだ。

「た、す」

「——返してやる、楠部への借金。俺が、お前を買ってやる」

息を吸おうとして、シャツを引き裂かれたことに呼吸が止まった。熱を持つ  
たような手が、胸を這い回る。

あいつは危険だ――楠部の忠告。脳内に蘇った時には、遅かった。

「汚れてるな、お前の体」

「や、やめろっ！、将、たすくっ！」

「大丈夫だから。綺麗にしてやるからな」

湿った感触に、鳥肌が立った。胸を舌で舐められて、楠部との感覚が甦って  
来る。

「早く突っ込みたいけど、啜えたいな」

「っ……っっ」

「お前のちんこ、舐めたかったんだよ……これでお前の全部、俺のもんだよな」

かちやかちやとベルトを外された。足を動かさそうとして、拘束された絶望感

が増した。

嘘だ

嘘だ

大東は俺を真面目にしたって……嗚咽が漏れると、大東の手が止まった。

「……お前が一人で生きていけると？」

「う、つう、ぐう」

「楠部の檻で甘やかされたお前が、自立する？——人の手で育てられた動物だ

って、野生じゃ生きていけないの？」

前髪を掻き分けられて、頬に熱い息を吐かれた。俺にのしかかっている男は、

荒ぶるものを静めようと——下半身を擦り付けていた。

ぐりぐりと硬くなった剛直の熱を感じて、泣き声が漏れた。

「可愛いお前が、檻の外で生きていけるわけないだろ？」

「や、やめっ、ろっ、大東っ——ぐっっ」

喉からひしゃげた声が出る。俺の全身を弄っていた大東の手が、首にかける。  
れた。

「大東じゃないだろ？たすくだ、たあすっく……ほら」

「が、あ、ぐう……っ、だ、ずっぐ」

「かわいいなあ、さーく」

「な、んんっ、ぐう」

キスをされて、肉厚の舌が侵入<sup>はい</sup>ってきた。怯えて引っ込んだ舌を吸われ、ぐちゅぐちゅと音が洩れた。

「んんっ、ん、くくくっ」

舐めつくすように、大東の舌が口内を動き回る。犯されているような気分になり、涙が溢れ出していた。

「はあ、つ俺が、新しい檻を用意してやるから、なあ、朔」

俺の上で、大東は唾液に濡れた唇を乱暴に拭った。

「あ、……ひっ」

「ああ、可愛い。お前の全部が可愛いよ、さく」

大東の、もう片方の手が、太ももを這い回っていた。下着に手を突っ込まれて、乱暴に尻を揉まれる。

手をかわそうと体を動かしても、枷に引っ張られて、足首に痛みが走った……  
…太くて骨ばった指が、そこを無造作に、こじ開けた。

「あっ、やめっ、い……っ」

「あれ、おかしいな」

大東は首を捻りながら、何本も指を入れてきた。指がなかで折り曲げられたり、好き勝手なことをされて、呼吸を忘れた。

視界に、壁いっぱいの写真。涙でぼやけたそれが、大束の異常性を語っていた。俺をここまでおびき寄せるために、友人のフリをしていたのかと、叫び声を上げた……情けない泣き声だった。

「あつ、たす、く、あ、や、やめて、え」

「——どうして言わない？」

顎を掴まれて、横を向いていた顔を正面に戻される。どろりと熱を持った、大束の目があった。

「いっ…な、なにが？」

「——ちんちん、ケツまんこぐちゃぐちゃ？だったか？」

「ぐっっ」

嘲る調子で、ぐりつと人差し指が動いた。秘所をこじ開けるように、乱暴に動いたかと思えば、そつと内壁を撫でる指——締め付けると、大束が笑みを深くした。

気持ち悪い、気持ち良い、気持ち悪い……嫌悪と快樂の波がきて、俺のものが反応し始める。前立腺辺りを探り当てられ、声が出ていた。

「レンタルルームで随分、楽しんでたな」

「あ、ああっ、あんっ、な、なんで、知って」

冷たいジェルのような液体が、股間に落とされた。ぐちゅ、ぐぷ……聞こえてくる水音に、耳を塞ぎたかった。

「お前を車で迎えに行く時は正直、焦ったよ。お前につけてた盗聴器<sup>やつ</sup>、GPS付きだったから」

「やああ、ああっ」

指を抜き差しされて、体に痙攣が走った。顔を上げると、俺の勃起したペニスに、大束が頭を近づけていた。

「っっっっっ」

GPS付き……レンタルルーム……どうして、いつ……快感に喘ぎながら、



〜第一部完〜

第一部 番外編〜楠部聡一郎〜

ターゲットから情報を聞き出す、スパイの手口——非常に興味深く、同時に、これで朔を自分のものにできるのではと、頭を巡らせた。

スパイは政治の中枢にいる、機密保持者に接触を図る時、必ずプレゼントを渡すそうだ。最初は軽い食事を奢り、相手に誠実でスマートな印象を与える。

そこからボールペンやハンカチ、些細な——相手が特別、欲しがっていないプレゼントを贈る。

贈り物が常時的なものになると、図書カード、チャージされたプリペイドカード、些細なプレゼントと一緒に、万単位の商品券を渡す。

あなたにお金を贈ります、と言葉にするような、無粋なことはいらない。美味しいお菓子だったから、一緒に食べないかと、プレゼントに商品券を忍ばせる。

相手が黙って受け取るようであれば、こちらの手中に収まっているようなものだった。そこから商品券は現金に変わる。一万円、三万円、五万円、十万円……相手はいつしか、現金を待ちわびるようになる。

そこで初めて、対価を求めるのだ——古典的かつ安直でありながら、人を籠絡させるには、もっとも効果的なやり方だとあった。

朔はまさか、友人だと思っていた男が、罠を仕掛けるなど疑う性分ではない。また、もう一つ、仕掛けていた罠に彼はまんまと嵌まり、苦しんでいた。

茶封筒の十万円を渡した時、あっさりと落ちた。

『欲しい……ほ、欲しいです。お金下さいっ、お金、下さい!』

喧騒の店内、朔はテーブルに額を擦りつけるように、頭を下げた。この世で最も愛おしくて、頭の中で何回、犯したか分からない男。

追い詰められた表情に——彼を好きにできるのだと、興奮した。頭の中で、何度も犯してはめちやくちやにした。夢想在、やっと実現する。

まだ太陽が高い昼間。俺はテーブルの下で勃起させながら、朔の股間を撫でた。俺が何を欲しているか、分かっているよね？

朔は怯えと諦めが混じった表情をしていた。いつか妄想した、組み敷いた朔の表情そのもので——ぞくぞくして、その場で射精するかと思った。

犯したい。

衝動的に公衆トイレに連れ込もうとして、冷静になった。彼にトラウマは植え付けたくない。

俺の言う事を聞けば、お金はいくらでもあげる。セックスも優しくする。そう、教え込まなくては。

むしゃぶりつきたくなるのを堪えて、朔の腕を引っ張った。

「——悪い、待たせたな」

都心のオフィス街。様々なカフェがあるが、大東に指定されたのは、ホテル

のラウンジカフェだった。

全面、ガラス張りのラウンジは、太陽の光が優しく降り注いでいた。すぐそばにある大使館の屋根も見える。周囲に植えられた植物は、さぞかし目が癒されるだろう……待ち合わせた男の顔さえ見なかったら。

「申し訳ない。著名な投資家様を待たせるなんて」

大束は大仰な仕草で、頭を下げた。余裕のある者だけができる、媚び諂った態度。テーブルに置かれたコーヒーカップを投げ付けてやろうか。怒りで、手が震えていた。

「……手短に。これから会食があるんだ」

「お前をよいしょしてくれる、経団連の爺さん達とか？」

「どつでもいいだろう。早くしろ」

薄気味悪い笑みを浮かべた大束が、紙袋を差し出した。

「コート、返すよ」

——躊躇ったのは一瞬。紙袋をひったくると、確かにコートが入っていた。

あの日、朔を迎えに行った日の、黒いコート。取り出した腕が、ぶるぶる震え始めていた。

「ああ、ちゃんとクリーニングには出したからな。いいもん着てるよなあ」

「……」

「ヴァルディター口だよな？……あいつも同じコート着てるから、すぐ分った

「よ」

「——朔は？」

俺が彼に、プレゼントしたコート。同じブランドで作ったコートだった。この男が返しにきた事実には、足元が崩れ落ちてしまいそうだった。

「あ、私もコーヒーで」

「——朔は？」

ウェイターに注文を済ませた大束に、再度訪ねた。あれから毎日、何百回と

電話をかけた。メールもした。

居場所は分かっている。大東のマンションにいるのだ。だけど

「朔が、お前のマンションから出て来た形跡がないんだが」

「気持ち悪いなあ。見張ってんのか？」

意に介した様子はない大東は、腕時計を見ていた。年季の入ったブランパンを覗く男は「こっちも時間無くてな」と言った。

「だったら早く答えろ。朔は？職場に出勤していない。昨日、退職届とセキュリティカードが届けられたと——」

「あ、これ書いてくれ」

質問には答えない大東が、ビジネスバッグから封筒と万年筆を取り出した。

目の前に出されたのは、薄っぺらい紙。小切手だった。

「……なんだ」

「朔がお前に借りてる金、俺が返すから。額、書いてくれ」

——手元のカップを投げつけようとしたところで「お待たせしました」とウエイターがやってきた。

「ありがとう」

にこやかな笑顔で、ウエイターにお礼を言う大束からは、余裕が滲み出ている。おそらく、長年欲していたものを手中に収めた愉悦に浸っているのだ。

「……ふざけてるのか、お前」

「怖いなあ」

茶化すような口調で、大束はカップに口を付けた。こいつは確信している。自分に利があるのだと。片頬を歪めた笑みを浮かべて……殴り付けたい。

だが、ここで問題を起こせば、朔に会うどころか、社会的地位まで失うことになる。腹が立つほど優雅な仕草で、大束はコーヒーカップを手にしていた。

「朔はさ、真面目になるってよ。お前に借金を返し」

「——おい。朔？お前が朔と呼ぶな」

我慢できなかった。ぎりぎりのところでカップを手に取り、コーヒーを飲み下す。苦みは後悔に変わる。

あの時、追いかけて捕まえておくべきだった。

すぐに戻って来ると、居場所はここしかない——俺なしでは生きられないようにしたはずだったのに。

目の前にいる男を、もっと警戒するべきだった。学生時代から、ハイエナのように、朔の周囲をうろついていた。小説を一切読まないらしく、合わない、朔自身が避けていたのもあり、気にも留めていなかった。

——虎視眈々と機会を窺っていたのだ。かつての自分と同じように、朔が罠に嵌まるのを、涎を垂らして待っていた。

ケダモノ。

空気を震わせるような、噛み殺した笑いだった。目の前に座る、不敵な表情

を浮かべた男が、カップを置いた。

「朔は俺のこと、将って呼んでくれるよ。俺の下で、たすく、たすくって言うんだ……可愛いだろう?」

「——お客様?」

ウェイターが足早に駆け寄って来た。何だと不審になったら、手元にコーヒーが飛び散っていた。カップを置いた拍子に、中身をぶちまけてしまったらしい。

「すぐに新しいものをお持ち致しますね」

「……申し訳ない」

「おいおい、小切手が汚れる。気を付けてくれよ」

大東が、さっとテーブルの小切手を手に取った。こいつの動作、全てが忌々しかった。名前を呼ぶ?朔が?将と?俺の下で……

怒りと嫌悪感で、眩暈がした。

……きつかけは些細な会話だった。

大学のサークルで、初の顔合わせの日。たまたま隣の椅子に腰掛けた男。古柳朔と、自己紹介をした彼は、日本文学が好きだと言った。

洋書ばかり読んできた自分は興味本位で——その時はまだ、彼に特別な何かを感じることは無かった。強いて言えば、顔が整っているなとか、それぐらいだったはず。

『え……武者小路実篤、田山花袋、夏目漱石、たくさんいる。そっちは？』

『俺？ジャン・ヴォートルンとか好きだな』

ヴォートルンと聞いて、彼は首を傾げていた。そのままなんとなく、本の貸し借りをして別れた。

次に会った時、本の感想を言い合って、また貸し借りをして——次第にお互いの部屋を行き来しては、小説の話で盛り上がった。

小説が原作の映画を観に行こう、撮影場所に行きたい……少しずつ、深まっ  
ていく友情。

いつしか、朔に会えるのを待ち遠しくなっている自分がいた。

でもまだそれは友情の範囲だった。朔が俺の指向に気づいている様子も無く、  
関係いつでも会える、気楽な友人の一人だった。

自分には、取り巻きといえる友人は大勢いた。生まれた場所から、自分は裕  
福で、嫌という程、恵まれていること。ある一定の人間が持つ「育ちの良さ」  
を自然と身に付けていることを自覚していた。

人は群がってくる。

俺が、交際相手に相応しい相手かと。または上の階級に引き上げてくる人間  
であるか。家柄、学歴、顔、言動……ありとあらゆるものが、品定めの対象に  
なる。

だから、品評されるだけの自分になろうと——表面だけを取り繕った、楠部

聰一郎が出来上がった。

外面だけを、社会的立場に見合うよう、コーティングしていく。それは「グ  
ルーム」の主人公、ハイムのように。

ハイムは妄想と現実の区別が付かないが、俺もそうだった。

社会が望む、楠部聰一郎。

両親が望む、聰一郎。

同じ家柄に生まれた学友達が望む、楠部。

これが自分なのか、演じているのか。常々、曖昧な境界線に立っていた自分

……受け入れてくれたのが、朔だった。

アメリカの付属高等学校から帰国し、初等部から顔なじみであった学友には、  
決して話せなかった。いつ、足を引っ張られるか分からないからだ。朔は完全  
な外部生。大学からの入学だったのが、気を緩ませた。

『継ぎ接ぎなんだよ』

朔は俺を否定せず、皆、そうだよと言った。中身まで、見る余裕がない——  
心に、すっと入ってきた言葉。

彼は、俺を受け入れてくれるかもしれない。

——仄かな期待は、すぐに打ち壊された。

朔は異性と付き合いがっていた。虐待と言える家庭環境で、勉強だけを強いられてきた彼。思春期に体験するような、幼稚なときめきを、読書会の女に向けていた。

このままでは告白したとして、彼は言うだろう。

『俺、偏見とかなないから。友達としていよう』

この持て余した熱情をどうしたらいい。朔への甘い恋愛感情は、暴力的な衝動に変容した。それは獣じみた劣情だった。

絶対に、手に入れる。

異性と手を繋いだこともないという朔。手をつないで、キスをして、セック

又をするのも、俺だけでいい。

友人として振る舞いながら、妄想の中で犯した。

『可愛いね、朔は可愛いよ』

手中に落ちた彼の服を剥ぎ取った。借金が頭にちらついているのだろう、朔は抵抗しなかった。体を震わせて、なすがままの彼をベッドに押し倒した。

妄想で、人を殺したハイム。

でも俺は、現実になった。

『すごい、ち、ろつのおちんちんっ、お、おくう、あ、ああっ、あたるっ』

『っ……好きっ？俺のこと、好きっ？』

『っあん、すき、ああっ、好きい』

朔のなか、ぎゅうぎゅうに絡み付く褌が気持ち良くて、息を吐いた。ペニスの先が当たる場所。しつこく突くと、朔は背中をしならせて、射精した。

『きもち、いいっ、いいっ、そっいちろう、きもちいいよお』

異性に抱いた甘い恋情を、快楽で塗り潰した。時間をかけて、体に教え込んだ結果、無意識に股を開くようになった朔。呂律の回らなくなった口で、何度も『気持ちいい』と泣く彼を貪った。

体を征服すれば、湯水のように金を与えて、頭をおかしくさせた。何も考えられないように、金を使えば使っただけ、俺から離れられなくなるのだから。

朔の本来、備わっていた良心がうずくたびに——お金、使っていいんだよ。

カードを握らせ、ギャンブルを止めなかった。歯止めとなるような友人達に、縁を切られた彼は、どつぼにはまっていた。

これでいい。

金を使わせては、セックスを繰り返す。ちゃんと俺とやれば、お金が貰えるんだと学習した彼は、ベッドで挿れて挿れてど、甘えるようになった。

おちんちん挿れて。奥、突いて。好き、好き、そっいちろうが好き。

何度も言わせては——洗脳に近い行為。だけどこれで、彼もいつか、俺に気持ちに向けてくると、信じていたのに。

「大東。小切手を」

手を出すと、目の前に座る男が、安堵したように頷いた。

「やっと書く気になったか……いくらでもいいぞ。あいつ、いくら借金あるんだ？」

朔は、俺がいないと駄目になった。体も頭も、俺がいないと、駄目なんだ。

——ゴロツ

「はっ」

目の前の男が、目を見開いた。

朔には、俺がいないと駄目なんだ。そうなるように、彼を嵌ませた。朔が、こんな男で満足するわけがない。

小切手を千切っていく。紙吹雪のサイズになると、テーブルにパラパラと散った。

「——金は受け取らない。朔は返してもらおう」

「はあ？朔が、お前から自立するって言ってんだよ。だから俺が立て替えるために持ってきたのに……おい、楠部」

「朔はな、俺がいないと駄目なんだ」

そうなるようにした。窒息してしまいそうな、甘ったるい綿菓子で、彼を包んだ。甘くて、温かい場所にいればいいよ。お金を上げる、何でもあげる。

だから、俺を受け入れて。

「駄目って……」

大束は吹き出した。我慢できないという顔で、口を手で覆っていた。

「……何がおかしいんだ」

「お前だろう？朔がいないと駄目なのは」

大東は涙が出るほどおかしかったのか、目元を拭っていた。

「俺が？朔がいないと駄目になるのは、俺？」

「……朔を返してくれ」

「朔はお前から自立するんだとよ……できるもんなら、やってみろ」

笑いながら、大東は立ち上がった。

「話にならねーな……それじゃあ、ここは俺が払っとくよ」

「大東……お前を潰す」

男は大仰に肩をすくめた。

「幸い、投資家様の世話にはなっていないんでね」

「……朔は俺がいないと、生きていけないんだ」

彼を借金漬けにしたのは俺だ。無制限に金を欲し、誘うように、股を開くよ

うになった朔。あんな状態にした彼が、他で生きていけるわけがない。

奪<sup>と</sup>り返さなくては。

今度は外に出さないで、もっともっと、墮落した生活に彼を沈めよう。そうすれば、彼は間違っ<sup>て</sup>、外に逃げ出すことは無くなる。

まず、接触の機会を。

芽生えた自立心とやらを摘み取って。

捕まえる計画を立てていかななくては。

血が上った頭は冷え、巡り始めた。こちらを見下ろした男が、ため息を付いた。

「だから、お前だよ。朔がいないと生きていけないのは」

『あー……あいつ、楠部の取り巻き』

ボート部の一人が、土手を指差した。桜が舞う、気持ちの良い季節。公園を自分の部屋だと勘違いしているのか、時おり背中を丸めたり、背伸びをしたり

——寛いだように文庫本を読む男が一人。

『こやなぎ、だったろ？』

『あゝ、そんなだった。あの楠部様にべったりな……金魚のフン？』

一人があからさまな口調で、揶揄した。周囲が同調するように、ドツと笑う。

午前中の練習が終わり、気が抜けた休憩時間。面白いネタが見つかったと、周囲が騒がしくなった。

『やっぱり楠部様に媚び売つとくと、就活とか有利になんのかね』

『あいつの父親、鈴仙重工業のトップだろ。なるんじゃない？』

『やー、庶民は必死だね』

周囲の軽口など、嫌でも耳に入ってくる。うちのボート部は、比較的裕福な

家の学生が多かった。だが編入の外部生が多く、初等部から進級した内部生と外部生の対立——下世話な噂話で、鬱憤を晴らすところがあった。

楠部聰一郎

名前を知らない者は、この大学にいないだろう。初等部からエスカレーター式で上がり、中高はNYで過ごしたとか。

生まれた瞬間から全てを持っている人種。

おそらく社会の上位数%の階級に属する男は、粗を探そうと躍起になる連中を、微笑で一蹴していた。

家柄、容姿、人柄、全てが完 パーフェクト 壁。常に楠部の周りには人が集まり、

人気者——外部生は影で、楠部様だ、取り巻きだと嘲笑っていた。

あんな男、いたらうか。

楠部の取り巻きなど、常に顔がぼんやりしている。全く、記憶になかった。

『あ？どした？大束』

名前を呼ばれたが、無視して土手に向かった。風が吹いて、桜の花びらが飛んできた。『こやなぎ』という男の周りにも、花びらが舞った。

近づくと『こやなぎ』は楠部の美貌には隠れるが、顔立ちが整った美男子だと気が付いた。だけど体が駄目だった。華奢とか細いを超えた、ガリガリ。それこそ風が吹いたら、吹き飛ばされそうな、頼りなげな雰囲気だった。棒のように細長い腕で、文庫本を捲っていた。

『……なにか？』

はっと我に返った。随分長いこと『こやなぎ』を見ていた。不審げに、眉を潜める彼に、話しかけた。

……俺が狂ったのは、多分、あの出会った日。

捲れた掛布団から、青白い脚が覗く。昨日、舐め回した、肉付きの悪い脚だった。スマホの画面に触れ、画像を拡大する。ベッドに寝転がる肢体から、目が離せなくなった。

「——あと五分程で、着きます」

「ああ」

楠部にコートを返したのが二十分ほど前。車が行き交う都心の道を、タクシ  
ーの運転手が、車を走らせていた。

隣に座った秘書の声に、適当に返事をする。スマホに映った動画——部屋  
に付けた監視カメラの映像は、画質も良く、朔の表情までよく見えた。ベッド  
で文庫本を読んでいるらしい。

表紙から、ピンときた。彼と出会った日、手に持っていた小説が忘れられず、  
何度も読み返しては——もう、復唱できる。特に宗近が、小野に真面目になれ  
と「正す」場面は。

きゅつと締まった足首には、いつもの鎖は付けていない。朔を閉じ込めてか  
ら、リビングから玄関に出るドアに、外側から鍵を付けた。

一人の時は、ある程度、自由に歩き回らせている——自殺なんか考えるなよ。

監視カメラ、付けてるからな。

脅しに『変態』『頭おかしい』と朔は罵ってきた。セックスの時は腰を振って、あれだけ可愛く泣くのに。楠部に開発された後だと考えれば腹は立つが、朔の痴態に、夢中になっていた。

ベッドで日夜、体を弄り回して、泣かせて、何度もいかせる。もう出ないと泣き喚く朔に挿れると、体が痙攣するのが、たまらなかった。

中イキして喘ぐ朔に、ペニスを締め付けられる瞬間。こちらが持って行かれそうな感覚に、俺は何も考えられなくなる。

『お前は可愛い』

気が付けば、体液に塗れた男を抱いて、繰り返していた。

自分は自制心の強い人間だと思っていたが——あいつと出会ったからだ。

色気など無い肉付きの悪い体と濡れた目が、おかしくさせる。夢中になって腰を振りたてるのに、後から後から、欲が湧いてくる。毎晩、暴れる劣情をぶ

つけるように、朔を抱き潰していた。

画像をこのまま見ていたら、下半身が反応する。リアルタイムの画像を中断して、アルバムを漁った。

朔の笑顔、ぼんやりした顔、寝顔……口の端から涎を垂らして、焦点が定まっていない目。股を大きく広げて、なかのサーモンピンク色の襞が綺麗に撮れていた。

俺のお気に入りの一枚。腹には乾き始めた残滓が点々と、後を残していた。今日は四つん這いにして、バックでやるつか。

深いところまで入るらしく、朔の体が喜ぶ体位だった。

「——社長、こちらを」

「ああ、買ってきてくれたのか……ありがとう」

秘書が差し出したのは、星新一のショートショートセレクション。楠部とカフエで話している間、書店で買ってきてくれと頼んだ文庫本だった。

パラパラ捲ったが、内容よりも朔の顔が浮かんだ。読んで早く、話がしたい。小説なんて、十代はほとんど読んだ記憶がなかった。人の空想にふけるなんて、時間の無駄だと切り捨てていたのに。

それが朔に会ってからだ、あいつだ、あいつの存在が、俺の何かを変えた。

……桜が舞う公園で会ってから、また「こやなぎ」の名前を聞くことになった。

理工学部の「古柳朔」が出した懸賞論文。AIの機械学習で、データベースの活用はどう変わっていくのかを論じていた。

教授にそれとなく聞いてみると、近年稀に見る優秀な学生、院は海外を勧められているとか、絶賛する声が次々と出てきた。

楠部の取り巻きAではなく「古柳朔」に会いに行こう。

講堂で会った彼は、公園で会った時のことなど忘れているのか、はいはいと

適当に頷くだけだった。

腹が立った。

自分の家は楠部ほどの財力はないし、外部生ではあるが、それでも人は初対面で、遜った態度になる。人を惹き付けて、従わせる能力はあると——自惚れではなく、客観的な事実だった。

イベントのサイトでも作ればいいのかと、端から馬鹿にした態度が滲み出る

男に

こつちを見る。

軽んじた態度に傷ついた反動か、怒りが生まれた。

起業したばかりの仲間に古柳を会わせて、彼に役職を与えた。最初は嫌がっていた朔も、同じレベルで話ができる同僚に心を許したのか、楽しそうにしていた。

でも俺が何の本を読んでいるのかと聞いても『言ってもお前には分かんねー

だろ』とか『話しかけんな』とか、素っ気なかった。

同僚達と和気あいあいにして、楠部——よく見ると、確かにキャンパス内で、あの男にひっそりと従う姿を確認した。

お互いに文庫本を差し出して、楠部は内緒話をするように体を寄せていた。

朔も嬉しそうにページを捲ると、指を差しして、熱心に話し込んでいた。

俺を見る。

怒りは大きくなっていた。

今ならはつきり言えるが、周囲に諫められても、朔に絡んでいたのは、彼を好きになっていたからだ。公園で会った男が、ずっと印象に残っていた。

だけど同性に惹かれた経験はなく——自然と朔を目で追ってしまう、得体の知れない感情に振り回されていた。

恋愛と言う面倒なプロセスを省き、割り切った相手と寝るのが、最も合理的だと信じていた。

感情の起伏が高まる人間関係など、うつつうしいだけ。だけど「古柳朔」には、こちらを見て欲しい、あの頃は感情が乱れて、ムキになっていた。

あいつが何を考えているのか、知りたい。でも教えてくれないなら……彼が読んでいる本を遠目から確認して、探し出す。手に取ることもなかった小説に、没頭していた。

物語だけでは飽き足らず「古柳朔」の情報をかき集めていた頃、不穏な噂を耳にした。

『古柳だろ？あいつ、やべー噂あるぞ』

ギャンブルにハマって、多額の借金をした。サラ金に手を出している、借金取りがアパートに押しかけて、内臓売った……

とんでもない話だった。まだ会社は立ち上げたばかりだったが、役職として、十分な報酬は与えているはず。すぐに噂が事実かと、聞いたただそうとした時だった。

見ていた景色が、一変したのは。

「あら、おかえりなさい」

「ただいま」

セキュリティカードを通して、自社に帰ると、廊下でジェニファー・チャンと遭遇した。朔が逃げるように辞めた役職に指名されたのが、彼女だった。

厚手のセーターに、スキニージーンズ姿のジェニファーは、片手にノートパソコンを持っていた。

香港出身、MITを卒業した彼女は日本文化——アニメや漫画が好きらしい。学生時代、翻訳されて輸出されるのは時間がかかるからと、日本にきた。

「なんか久しぶりじゃない？出張から帰ってきたら、いきなりリモートワークするとか言い出して、会社来なくなるし」

「言っただろ？猫飼いはじめたって」

「将が猫とか、意外。動物を可愛がる気持ちとかあったんだね」

「まあ……でもそろそろ戻るよ。君もいなくなるから」

ずけずけとした物言いに、苦笑が漏れた。今は漫画も、雑誌が発売されれば、即ネットで配信が始まる世の中になった。便利な社会になったと言っ彼女はもうじき、シンガポールの支社長になる。

廊下で立ち話をする形になり、腕時計を見た。そろそろ帰らないと。

「なんだっけ？拾った？捨て猫だったんだよね」

「いや。<sup>と</sup>奪ったんだよ、人の猫を。可愛くて我慢できなかったんだ」

一呼吸、間が空いた。

「……犯罪よ」

潜めた声に、吹き出した。

「冗談だよ、ジエン！本気にしないでくれ」

「もく、変なこと言わないでよ……あんた普段、冗談とか言わないから」

冗談、に安心したのか、肩をバシバシ叩かれた。笑いを堪えるために、奥歯を噛み締めた。

つい最近、猫を飼い始めた。可愛い黒猫。元は室内飼이었다のか、毛並みが綺麗だったよと話したのが、一ヶ月前だったか。

「猫の写真とかないの？見せてよ」

「写真？あー……動画もたくさんあるけど、見せられない」

「なんでよ？」

「分からない？可愛すぎると、誰にも見せたくないって気持ちになるんだ」

本当は見せたかった。部屋に監視カメラ、付けてるんだ。リアルタイムで可愛い猫の様子が見えるんだよ、と。

「仕事中毒のあんたがね、猫に夢中になって、会社、傾けないでよ」

「何言ってるんだ。猫のために働くんだよ」

スマホのアルバムには何百枚と写真が収められている。特にお気に入りの一枚は、彼女が見たら卒倒するだろう。

「あ、後任のねえ……彼、来るんでしょ？」

彼女は目を輝かせていた。昔、朔とは技術的な話で盛り上がるらしく、意気投合していた——胸のむかつきが抑えられなくて、よく二人でいるところを邪魔していた。

「久しぶりだし、ね、先に連絡先教えて。引継ぎもあるし、あとほら、メンバーも変わった人いるから、紹介しておかないと。親睦も深めないかね」

朔が帰ってくると、ミーティングで報告した。一番に喜んだのが、彼女だった。顔を綻ばせた様子に、ただの同僚以上への好意を読み取る。早めに摘み取っておくか。

「……ジエン、お手柔らかに頼むよ。可愛い恋人を任せられるのは、君しかい

ないから」

目の前の顔が、硬直する。動揺したのか、前髪をかきあげていた。

「あ……そう、知らなかった。ええ、ほんとに……あゝ、いつから?」

「ついでの間」

「あゝ、そう。うん、まあ、仕事とプライベートは切り分けてよね」

「分かってるよ。朔を頼むな、ジエン」

廊下で別れ、部屋に資料を取りに行く。来月、このオフィスに朔がやってくる。

みんな、彼を歓迎するだろう。

ポケットに入れたスマホを取り出した。ベッドで黒猫が寝ていた。寝顔は

幼くなるから、可愛い。帰ったら、髪を梳きたくなった。

楠部の取り巻き

それが「古柳朔」の評価だった。金魚のフンのように、金持ちに媚びようと

必死な外部生――

評価が一変したのは、朔の忘れ物を届けようと、地下の駐車場に入った時。

最初のオフィスは都心から離れた、二十三区外にある事務所だった。廊下の蛍光灯は点滅して、ただ広いだけが取り柄の古いオフィスに、パソコンを置いた。

そんな場所だから、地下の駐車場は薄暗く、車を停めるのは俺だけだった。

朔がデスクに忘れていった文庫本。ブックカバーを外すと漱石の「虞美人草」だった。これなら俺も読んだ。

届ける口実に話しかけようと外に出たが、人影がなかった。おかしい。駅から離れた場所にあったので、後ろ姿ぐらい見えるはず。

首を捻りながら、しんと静まり返った駐車場に入った。乱れた息遣いと潜めるような声に、足を止めた。

かすかに聞こえる声を辿って、おそろおそろ非常階段に近づいた。どうして

あの時、足が動いていたのか、分からない。

……今は見なければ良かったと、少し後悔している。あれからだ、俺が狂ったのは。

『そう、聰一郎、お願い、待て、って、なあ』

『駄目。ここで脱いで』

『そういちろお……』

弱々しく名前を呼んでいたのは、朔だった。柱の陰から見えた光景に、啞然とした。

もがいて抵抗する朔に、巻き付いたように抱き付いた楠部。朔のシャツをたくし上げ、無遠慮に手を突っ込む様子に——文庫本を落としそうになった。

涙目になった朔にキスを繰り返して、楠部がベルトに手をかけていた。

恋人同士でしかあり得ない、性的なじゃれあい。ショックの大きさから、目が離せなくなっていた。

『明日ね、記念日だから。朔が誓約書にサインした日から一年』

朔は嫌だ、嫌だと首を振っていたが、楠部の一言で凍り付いた。記念日、誓約書、サイン。単語が耳にこびり付いていた。

楠部はジーンズのチャックを下げると、跪いた。一目で高価なスーツだとわかる生地を汚して、朔の局部に顔を近づけた。

『っあ』

蕩けた声が上がった。朔は楠部の髪をめちゃくちゃに掴んで、腰を振っていた。

『ああっ、あ、んん……っ』

半開きになった口から、嬌声が洩れる。下半身が熱い。気が付いた時には既に、半勃ちになっていた。朔の喘ぎ声が、暗い湿ったコンクリートに響く。

まるで脳内を犯されているようだった。口淫されて、あんな反応をするのだ。

俺がフェラしたら、ベッドだったら、挿入したら……あの日から、自慰のオカ

ズは不健康そうな男になった。

呻き声が聞こえて、朔が射精したのが分かった。楠部は飲み込んだのか、口元を親指の腹で拭っていた。

『朔、記念日だからね……現金とかがいいかな』

『……そういちろう』

放出した朔が、泣き出した。号泣しながら『ごめんなさい』と、楠部に縋りついた。

『ごめん、ごめんなさいっ、お、俺、やめようって、やめたい、のにつ、か、金返すからあっ』

異様な光景だった。記念日、現金、やめる、金を返す……単語から導き出された。朔は楠部に借金をしている？ではサラ金だとか、内臓を売ったというのは、ただの噂か。

楠部は微笑を浮かべていた。朔を抱きしめると『いいんだよ』と言った。

『お金、気にしなくいいんだよ。いくらでも貸してあげる……返す時は、分かってるよねっ』

『そ、そういちろお……』

頭を撫でられ、朔は目を真っ赤にしていた。二人が唇を合わせると、駐車スペースに水音が響いた。

堪らず、その場から離れた。フェラには興奮した癖に、キスには——恋人同士のようなやり取りに我慢できなかった。

二人のやり取りを盗み見て以来、俺は本格的な調査を開始した。噂話程度の収集ではなく、友人や家族関係を洗い出した。盗聴器やGPSを着けて、本人の行動を監視した。

常識を逸脱した行為だと、頭の片隅では理解していた。それでも事実が明るみになっていくにつれ——朔が楠部の取り巻きではなく、楠部が朔に執着しているのではと、疑い始めた。

楠部は、無尽蔵に金を与えているらしく、朔はギャンブルに、のめり込んでいた。

湯水のように金を使わせる目的とは一体。誓約書とやらにあるらしいが、内容が不明。

だが金に縛られて、朔は楠部に付き従っている。楠部から離れることができない朔——これが楠部の目的だったら？

楠部の金とセックスとギャンブルに溺れている朔。

底なし沼に沈められた彼を救いたい。

宗近が、倫理観のない小野を「真面目になれ」と正したように。

朔と出会った——きっかけとも言える、夏目漱石の「虞美人草」。あの小説で、まともなのは宗近だけだった。清く正しい男。俺がもっとも好感が持てる人物だ。

宗近のように、俺が朔を正すのだ。

調べ尽していることなどおくびにも出さず、真面目になれと説き続けた。ひとつ誤算だったのは、揺さぶりをかけたら彼が会社を辞めたことだった。あの時、俺に縋りつければ、金を返してやったのに……随分、遠回りをしてしまった。

「ただいま、さく？」

こちらに背中を向けた、ベッドに横たわる猫。頭を撫でると、うざったそうに顔を背けられた。

「おかえりぐらい返事してくれないのか」

「変態と会話する気ない」

文庫本を捲る彼が、愛おしくて堪らなかった。髪に指を通して、額にキスをした。

「虞美人草、読んでるんだな……俺は宗近が一番好きだ。まともで、道理があ

る」

「俺が一番嫌い」

「どうして？登場人物の中で一番、清く正しい」

首筋に鼻をくつつけると、同じボディソープの香りが漂ってきた。同じ部屋に住んで、俺の手料理を食べて、同じベッドで寝る。

少しずつ、彼が俺のものになっていく実感があつた。

「どこがだよ。小野と藤尾の仲を引き裂いて……クソ野郎だ」

悪態をつく朔の首筋を人差し指でそつと撫でた。途端、体がビクビクと反応し始めるので、笑いが込み上げた。

楠部に沈められた頭はギャンブルに溶け、体まで開発されていた。セックス中、挿れて、挿れてと火が付いたように泣く男の背中を優しく撫でた。

『……三百万』

『三百万で売ったのか……体を』

『……うん』

膝から崩れ落ちてしまう感覚。誓約書の内容を吐かせて、寝た経緯に愕然とした。こいつは三百万で、たったこれっぽっちの金で、楠部に体を暴かせた。

衝動的に、首を絞めたくなるような怒りが、湧き上がった。

俺だったら。

頭の中を支配するのは、俺だったらと不毛な「もし」。

もし俺だったら、三百万？甘い。あとゼロを二つ付けて、朔を檻に入れた。

中途半端に溺れさせるよりも、もっと深い場所で窒息させていた。

「なっ」

朔の手にあった、文庫本を叩き落とす。ネクタイを外して、両腕を縛り上げた。  
た。

「なにすんだよっ！」

「やりたい」

内腿を掴んで、股を裂くように脚を広げた。写真に撮った、ピンク色が見えない。やっぱり拡げないと駄目か。引き出しに入れていたローションを出して、手を滑らせた。

「さーく」

「あっ……」

指を這わせると、艶のある声が出た。楠部に食べ尽された体。気にしない。蹂躪された体にはもう一度、快楽を上書きしていく。

内腿は震えて、皮膚が赤く染まり始めていた。

「さくのおちんちん、おっきしてるよ」

「っ……やめろ、あっ……その口調！」

「ほらあ、我慢汁でてるよ」

盗聴器で聞いていた楠部との行為は、卑猥な単語を連発していた癖に。口ではやめろと喚ぐが、わざと幼児言葉で責めると、朔の体は反応が良くなる。

「…ああっ…やあっ」

指を増やして、掻きまわす。ぐぷっじゅぷっ、くぐもった音に、朔の喘ぎが溶け合っていく。

「た、たす、くう、ったすく！あ、ひっ」

濡れ始めた中で指を曲げると、悲鳴を上げる可愛い男が「たすく」と繰り返す。俺を見向きもしなかった朔が、やっと下の名前を呼んだ時、その場で犯さうかと考えたが、理性を振り絞った。

「……真面目にしてやるからな」

溶けた泣き声を上げる口に、キスをした。遠慮なく舌を入れて、口内を荒らししていく。真面目にしてやる。

俺が真面目にしてやるから——楠部に侵食された身体。全部、根っこから作り変えてやる。口を離すと、透明な糸を引いた。

「お前を救えるのは、俺だけなんだよ」

前立腺辺りで第一間接を曲げた。悲鳴が上がり、何度もしゃぶったペニスの先から、じくじくと汁が流れ出していた。

「あ、そこお、そこっ、い、いく、いっっちゃっっ」

朔の体がよじれるたびに、シートが乱れる。たっぷり解したら、一回いかせて。バックでやろう。朔はペニスをつつまれなないと、満足しない身体になっていた。

『朔は俺がいないと、生きていけないんだ』

「……………」

唐突に、楠部の言葉が脳裏に浮かんだ。馬鹿な男だと、一蹴した。学生時代、周囲は勘違いをしていた。朔が楠部の取り巻きだと。

見ていた景色が一変する、真逆の事実。

朔がいないと生きていけないのはお前だろう？腹の底から笑いが出た……はずなのに。

「俺も、か」

ベッドに横たわる肢体が痙攣する。ペニスから吐き出された精液が、薄い腹を汚した。溶けきった朔の目に、男が映し出されていた。

前髪を乱して、必死な形相——生きていけない。だから絶対に、俺は逃がさない。